



案山子
二〇二三 夏



新潟大学文芸部



目次

案山子二〇二三 夏号	
案山子二〇二三 夏号	3
目次	
目次	7
二〇二三夏 お題作品『冠』	
二〇二三夏 お題作品『冠』	11
でヴぁの冠 /双葉 離泰	
でヴぁの冠 /双葉 離泰	15
ひかり /渡邊望生	
ひかり /渡邊望生	23
舞台上の栄光 /岩崎 ひのり	
舞台上の栄光 /岩崎 ひのり	33
遊覧 / 和槻 泉	
遊覧 / 和槻 泉	49
winter /今泉とびら	
winter /今泉とびら	57
「冠」 / 寛容蝕物	
「冠」 / 寛容蝕物	69
二〇二三夏 通常作品	
二〇二三夏 通常作品	75
効用最適化問題 /廣瀬 勇実	
効用最適化問題 /廣瀬 勇実	79
断罪 /青石 すみれ	
断罪 /青石 すみれ	83
詩集：マジックアワー /汐咲ひかり	

詩集：マジックアワー / 汐咲ひかり 91

奥付

奥付 97

案山子二〇二三 夏号

案山子二〇二三 夏号

案山子二〇二三 夏号

目次

目次

目次

○夏号 お題作品『冠』

でヴぁの冠	双葉離泰
ひかり	渡邊望生
舞台上の栄光	岩崎ひのり
遊覧 和楓泉	
winter	今泉とびら
「冠」	寛容蝕物

○夏号 通常作品

効用最適化問題	廣瀬勇実
断罪	青石すみれ
マジックアワー	汐咲ひかり

二〇二三夏 お題作品『冠』

二〇二三夏 お題作品『冠』

二〇二三 お題作品『冠』

でヴぁの冠 / 双葉 離泰

でヴァの冠 / 双葉 離泰

でヴァの冠

でヴァは強い花の香りで目を覚ました。枕元の開け放たれた窓から、白く、丸い花が一輪見えた。朝日を照り返し、ちらちらと明滅している花卉に薄らと、乳呑児のような皺が刻まれている。丁度、今朝、開花したものであろう。

でヴァは、昨夜、月明かりの下で眺めた蕾を思い出して、不愉快になった。元来、でヴァは花というものが嫌いであった。特にここ数年はその性向が著しく、嫌悪はもはや怨嗟といえるほどに膨れ上がっていた。

でヴァは、花の枯れ方がどうにも我慢ならなかった。離散し、地に落ち、醜く濁り、やがて土壤に還りゆく、その過程が惨めに思えて堪らなかったのだ。花は美しいまま、雪のように溶けてしまえばいいのに、そうでなければ初めから、花など咲かなければいいのに、と、でヴァは常々考えていた。

花は、清浄な朝の中心で、でヴァとなんら連絡なく香り続けていた。今にも腐り落ちてしまいそうで、でヴァはもう、花を見つめているが出来なかった。窓を閉め、でヴァは呟いた。

「次は僕だ」

埃まみれの制服に袖を通しながら、でヴァは冠について考えた。十八歳のでヴァは、そろそろ冠を拵えなくてはならない。

でヴァの身体は硝子のように透き通っている。名前が不完全だからだ。二十六音。五音足りない。ゆえに、でヴァの身体は脆弱で、十八年を超える時の重さには耐えられないのである。このままではいずれ、肉体は砕け、霧散し、消失してしまう。五つの音から織り成す冠で名前を補い、身体を色づける必要があるのだ。

五つの音は自分で決めなくてはならない。しかしでヴァは、未だ一音も決めていなかった。というか、決められなかった。

でヴァは、出来ることなら冠など頂きたくなかったのである。でヴァは、自分の透きとおった美しい身体を愛していた。不完全な身体を手放したくはなかった。それが、幼稚な我儘であることが判らないでヴァではなかったが、そもそも冠を必要としていないでヴァの脳髓が、まともな音を吐き出せるはずもなかった。

制服の釦を留めながら、でヴァは幾つかの音を歌ってみた。山鳥の鳴き声、でヴァには可愛すぎる。雪の笑い声、でヴァには優雅すぎる。海のがなり声、でヴァには強すぎる。鉄の歎歎、月の鼾声、雨の嬌声。どれも、やはり、でヴァにはしっくりこないのである。

詰襟のホックをしめて溜息を一つ。暦をちらと見て、戴冠式の日付を確認したでヴァは、胸が冷たくなるのを感じた。もう幾日もない。もう幾日もない、ということを楽しんでいる自分がある。このまま、戴冠式を迎え、冠を頂かず、たった一人で砕け散ることを期待している自分がある。消失を、期待している自分がある。

鏡の前に座り、髪を纏めながら、でヴァは額が崩れかけていることに気が付いた。でヴァの沈鬱な思惟が、身体の終わりを引き寄せているのである。いつもと違う位置で髪を纏め、それを隠す。無理やり隠したから、不格好になる。それでも、心の揺らぎが他者に知られるよりはよかった。

「ご飯よ。そろそろ起きなさい」

台所から声が聞こえた。でヴァは部屋を出た。

「髪、乱れてるよ」

「え、ほんと？」

でヴァは白々しく答えた。

勝手仕事を終えたマヌシヤは、朝食を啄むでヴァをぼんやりと眺めていた。

「制服も埃まみれじゃない。まったく。あなたも、もう十八なんだから、きちんとしなさいよ」

それが、単に身だしなみをとがめるためだけの言葉ではないことを、でヴァは知っていた。十八。だからどうしたというのか。朝食と一緒に、でヴァは言葉を飲み込んだ。

「冠、どうするの」

「考えてるよ」

「……そう。早めに、ね。会場の予約しなきゃだから」

「いつまで？」

「いつまでだろ……わかんないや。とにかく、早めに」

でヴァは、マヌシヤの声が聞こえなくなるように、何度も飯を咀嚼した。

「あなたの身体は何色になるかな」

「さあ」

「なんで、あなたはそう冷めてるの。楽しみじゃないの？」

「まあ、うん、なあ」

でヴァは曖昧な返事をした。

「青系かなあ。なんか青系っぽいなあ」

マヌシヤは自分のことのように話す。マヌシヤの目は、でヴァの身体の向こう側を見ている。

「そう？」

「青だったら好いんだけどね。でもまあ、あなたなら、少なくとも紫ぐらいは行けるでしょ」

「わかんないよ」

「ええ、無理なの？」

「いや、多分青だと思う」

でヴァは、わざとらしく真面目な声色で言った。

「もう、変なこと言うのやめてよ」

マヌシヤが不安げに言った。

「ほら、早く食べちゃいなさい」

マヌシヤは台所に戻っていった。一先ず。会話が終わったことに、でヴァは安堵した。

朝食を茶で流し込み、でヴァは洗面台へと向かった。歯磨きをするのが面倒で、口を少しだけゆすぎ、その濡れた手で髪を少しなでつけた。玄関で靴ひもを結びながら、香水をつけ忘れたことに気が付いたが、そのまま、なにもつけずに家を出た。

でヴァは後ろの扉から滑り込むようにして教室に入った。既に半数ほどの生徒が登校していた。中身のない、情念だけを詰め込んだような会話が、あまり広くない教室を飛び交っていて、さながら夏のような気がした。

でヴァは、誰とも目を合わせないようにしながら席に着いた。全身が妙に火照った。汗腺が詰まって、体内に溜まった澱が異臭を放っているような気がした。でヴァは香水をつけてこなかったことを後悔した。

「おはよ」

前の席のプレタが話しかけてきた。

「お、お、おはよ」

でヴァは、不自然な返答を誤魔化そうとして、二つ、三つ、咳ばらいをした。プレタが一瞬顔を顰める。でヴァは焦って続ける。

「そ、そういえば、君、冠決めた？」

実のところ、でヴァはプレタの冠の事情などさほど興味はなかった。斯様な質問をすることで、自分にとって冠の話題は禁忌ではないことを、世間話に過ぎないことを、全く無意識に、プレタへ示そうとしたのである。

「ああ、決めたよ」

「えっ、いつ」

「このあいだ」

「へえ……」

「なに、まだ決めてないの」

「いや、まあ、意外と時間あるし焦っても仕方ないかなって」

半端に笑いながらでヴァは言った。

「そんな時間ないぞ。大丈夫なのかよ」

「大丈夫、大丈夫だよ」

「いや駄目だろ。はやく決めろよ」

「ははっ、そうだねえ」

「いや、ほんとに」

「ははっ」

プレタに悪意はない。そんなこと分かっていたが、でヴァは、歯に衣着せぬ物言いのプレタが恨めしかった。恨めしかったし、そんな風に思う自分が嫌だった。プレタを否定することで、自分が汚れていくような気がした。

ブレタの言葉はまるで刃物のようであった。とげとげしい、という意味ではなく、切れ味があるという意味で。でヴァが必死で隠そうとしているあらゆる秘密、弱点を、一つ一つ抉り出していくような、そんな無遠慮さがブレタにはあった。ブレタの言葉に悪意はないが。それは悪性を孕んでいた。

優しいやつなんだ、と、でヴァは心の中で擁護した。ただ、僕の弱さを知らないだけだ。嫌なやつじゃないんだ。嫌なやつなのは、僕の方だ。

それ以上話しかけられないように、でヴァは荷物の整理を始めた。

午前の授業が終わり、昼休み。昼食を買いに行こうとしたでヴァをアスラ教諭が呼び止めた。

「ちょっと来い」

面倒くさそうにアスラは言った。冠の話だろう、と、でヴァは思った。

黴臭い空き教室の真ん中で、アスラとでヴァは向かい合った。

「んで、冠はどうするんだ」

「いやあ、まだ決められなくて」

「お前だけだよ。まだ決めてないのは」

アスラはこつ、こつ、と机を指で鳴らす。でヴァはそれを、じっと見つめていた。

「悩んでいいのはな、でヴァ、ちゃんと答えを出せる奴だけなんだよ。わかるだろ」

「……はい」

「お前みたいなやつがな、毎年、何人かはいるんだ。でも結局、みんな最後には、自分なりの答えを見つけてるよ。……皆、諦めるんだ」

「……」

「お前が悩んでる理由はわかるよ」

でヴァの心筋が震える。

「お前はな、自分が特別であるという幻想を捨てられないんだよ」

「そういうわけじゃ……」

「いやそうだよ。あのな、世界はそんなに甘くねえよ」

アスラの口角が微かに上がる。でヴァには、アスラが楽しんでいるように見えた。

「皆、特別になりたいし、好きなことをして生きていきたいんだ。だけど、何処かで折り合いをつけて、現実を見るんだ。そういうもんなんだよ、仕方ないだろ」

「……はい」

「なにも適当に選べって言ってるんじゃないんだ。ただ、ちゃんとしろって言ってるんだ。な？」

「はい」

「放課後。冠の音を一音でもいいから決めて来い。あとは一緒に決めてやるから」

「はい。ありがとうございます」

アスラは満足げに頷いた。昼休みの終わりを告げる鐘の音が、教室を鈍く揺らす。

「よし。じゃ、次の授業、遅れるなよ」

アスラが出た後の、一人ぼっちの教室で、でヴァは深く息を吸った。黴と、腐りかけの木材の甘い香りがした。

でヴァの右手にひびが入った。

でヴァは、なにか、大きな力の流れに背中を押されるのを感じた。それに抗うように、ゆっくりと歩いて教室に向かった。

アスラ教諭の言うことは至極真っ当であった。しかし、的外れであった。でヴァは特別になりたいわけじゃない。それどころか、でヴァは、何者にもなりたくないのである。でヴァは、永遠に、でヴァのままでありたいだけである。

「おい、遅れるぞ」

プレタが小走りで、でヴァを追い越した。プレタは何冊かの本を小脇に抱えていた。

でヴァが教室に着いたとき、既に教諭は教壇に立っていた。何か言われる前に、でヴァは急いで自席に着いた。

授業開始の鐘が鳴った。

「起立」

生徒が一斉に立ち上がる。

「気を付け、礼」

生徒が一斉に頭を垂れる。でヴァは、ことさら深く礼をした。

「着席」

生徒が一斉に席に着く。無論、でヴァも席に着こうとした。が、その瞬間、でヴァに静電気のような直感が働いた。

座ってはいけない。座れば、今に、脚が崩れる。

でヴァは立ち尽くした。一步も動けなかった。

「どうしました？」

教諭が心配そうに尋ねる。

「す、すみません。体調が悪くて」

「大丈夫？ 戴冠式も近いですし、無理そうであれば早退しても構いませんよ」

「は、い。そうします。すみません」

「いえ、お大事に」

でヴァはゆっくりと教室を出た。もう既に、脚の内部は崩壊していて、障子紙ほどの輪郭がかるうじて身体を支えているような気がして、でヴァはうまく歩けなかった。教室中の後期の視線が刺さる。横目で見えたプレタは、机の下で、さっきの本を読んでいた。

でヴァの身体には終わりが近づいていた。

心配そうな顔のマヌシヤが玄関の前で待っていた。何か聞いたそうにしていたが、でヴァは一言、「大丈夫」とだけ言って自室に入った。マヌシヤと会話できるほど、でヴァに気力はなかった。

詰襟を脱いで、投げ捨てる。腋の下だけに、異様に汗をかいていた。髪を解く。額はもう完全に崩壊していて、親指ほどの穴が開いていた。その穴から、部屋の冷気が入り込み、身体が酷く冷えた。

寝床に身を投げる。でヴァはもう、なにも考えたくなかった。というか、考えられなかった。現実と精神の狭間で、でヴァの脳髄は最早、一切働こうとしなかった。

脚の感覚がない。もう、崩れてしまったのだろうか。別にいいか。今は、眠ってしまいたい。

耳元で虫の羽音がした。今朝、窓を開けていたときに入ったのだろうか。羽音は声のようであった。言葉ではなく、声。そこにはでヴァを責め立てる意味だけが込められているのだ。頭蓋の中で反響し、虫は二匹に、四匹に、八匹に増えていった。

でヴァは虫を叩こうとしたが、腕が動かなかった。腕どころか、指も、首も、眼球ですらまともに動かなかった。もっとも、それらが動いたところで意味はなかった。虫は、でヴァの中に入り込んでいたのだから。

アスラ教諭は、きっと、でヴァを待っているだろう。それが教諭の仕事であるのだから。哀れなことだ、と、でヴァは思った。

身体が崩れる音がした。

ブレタはどんな冠を頂くのだろうか。あいつのことだ。どうせ、当然のように、それなりに高貴な冠を拵えたのだろう。そして、あいつの言葉はより鋭くなるのだろう。哀れなことだ、と、でヴァは思った。

身体が崩れる音がした。

虫の羽音が止んだ。くたばったのであろうか。いや、逃げたのだろうか。そして、出口のないこの部屋を飛び回っている。哀れなことだ、と、でヴァは思った。

崩れる音がした。

でヴァは何も見えなくなった。

でヴァは真っ赤な夢を見た。空も、大地も、大気も赤く、そして黒かった。

夢の中で、でヴァは、でヴァを見つめていた。その身体は、世界と同じ色であった。燃えていた。

ああ、こんな色か。見苦しい色だな。失望されるだろうな。

しかし、それでよかった。でヴァは、安心していた。

でヴァの足元には灰燼が堆く積もっていた。醜かった。

しかし、それでよかった。でヴァは、安心していた。

痛く、重たく、熱く、苦しかったが、それでも、燃える身体はでヴァが思うよりずっと心地の良いものだった。

春の太陽のような安心感の中、でヴァは悲しくてたまらなかった。

次の日。寝床の中には何もなかった。もう誰も、でヴァを覚えてはいない。

ひかり / 渡邊望生

ひかり / 渡邊望生

ひかり

階下は明るかった。夜の喧騒の中に、私は一人息を潜めていた。ほんの少しでも気を緩めれば、窓から斜めに差し込んでくるネオンが私の内側さえも侵してしまうような気がした。蛍光色は不可解な程に鮮やかで、それでいて染みのようにじっとりとしている。私は身を固くして、つま先を自らの方に引き寄せる。部屋の闇も外の灯りも、流動する生物のように形を変え、音もなくこちらに迫ってくる。

膝頭で這うようにして窓に近付きガラスに体を預けると、耳に掛けた髪が枝垂れのようによぼれて来た。ふと見上げた空には雲が引き伸ばされていて、月はどこにも掛かっていない。その下で行き交う人々の群れは、信じられない程の不潔さで嬌声と諍い声を一緒くたにしていた。私はその雑踏の中に、アサミの姿を探していた。

腕時計を見ると、既に約束の五分前の時刻になっていた。彼女がこの街のどこから現れるのかは分からない。ネオン看板も捨てられた空き缶も確かに体温を持っていて、すべて生々しい人間の気配を感じさせた。私はひたすら、切実な気持ちで視線を動かす。彼女がこの街のどこかにいるのなら、いち早く見つけ出さなければいけないような気がしていた。ここから見える何十、何百という人の頭は波打つように揺れて、互いに近づいたり離れたったりしていた。

「アサミ？」

そう口にしたのは、大通りの中に一人で歩く女の姿を見つけた時だった。通りを行く人々は小魚の群れのように不可思議な規律を持っていたけれど、その中で体をくねらせ向かってくる人の波をよけながら歩いている女の姿があった。茶色い髪は長く伸びて、その先が微かに揺れている。ほんの小さく見える両の目がネオンの灯りを受けて光った。私はそこで確信する。記憶の中の姿が、ゆっくりと浮かび上がり瞳の裏に滲んで来る。アサミは、私のいる建物の一階へと滑り込むように入ってきた。

「起きてる？」

階下にやって来たらしいアサミの声が響く。はっとして窓から顔を離すと、木造の階段を踏み鳴らす音が聞こえて来るのが分かった。

起きてるよ、と私は静かに声にした。恐らく彼女には聞こえていない。私は一瞬の内に様々なことを思い出し、少し身構えて息を吸う。記憶の中で何度も繰り返した声、現実のものとして耳に響いている。階段の音が少しずつ大きくなって、私の耳はもうその音以外を拾おうとしない。

「本当に帰って来てたんだ」

ぎい、という最後の音と共に、部屋の隅にアサミの白い裸足が伸びて来た。一瞬のそれが、くっきりと縁取られて視界の隅に映る。

「うん」

私は立ち上がって言う。彼女は部屋の隅に溜まった闇の中にいた。

ネオンの灯りが長く伸びて、私の下ろした腕を染めている。それが、私の中の熱を照らし出すような気がした。どこを巡り、どこに行き着くのか、考えたくもないような熱の有様を。

「久しぶりだよね」

アサミは大きな上着から白い脚を伸ばして立っていた。赤く薄い唇は動く気配がない。上着の下から覗くプリーツスカートの裾が、彼女の肌に触れていた。空いたチャックの合間から青々としたセーラー服の襟が見える。それが、痛みを伴う位に鮮烈な青だった。

そしてそこにはもう一人、知らない誰かが立っていた。誰か、というより、この街に似合わない年端もいかない子供だった。

「その子はアサミの息子？」

私はほとんど意識しない内に口を開いていた。短髪の、小柄な子供だった。どうしてかは分からないけれど、一目見たとき、私には本当にアサミが自らの体で以て産んだ子のように思えたのだ。子供の黒い目をまじまじと見つめると、彼もこちらに目を向けた。しかし、なぜか視線が交わらない。シャツには皺が寄りズボン是不格好に捲られているのに、その立ち姿は清潔感に似たものを感じさせた。

「違うよ、そんなわけないでしょう」

アサミは笑いもせず答える。

「この子は余所者だよ。あんたと同じで」

良く見ると、子供の右手は彼女に預けられていた。余所者呼ばわりされた子供は、その言

葉の意味を分かっているのだろうか。眉も唇も一切動くことなく、隙も体温も感じられない様は絵画の中の少年のようだった。

「余所者？」

「そう」

彼女は即座にその言葉を肯定した。頭で考える必要などない、圧倒的な真理を口にするかのよう顔をして。

私はアサミに関する記憶を一つ一つたぐり寄せていた。彼女に関する全ては、私の中で腫物のように熱を持っている。私はその熱を手放さないために必死だった。記憶の流れに逆らい続けるというごく個人的な決め事を、私は操のように固く守り続けていた。

「ねえ、いつここに来たの？ あなたが……私と離れてから」

私は言葉を選びながら言った。私たちの間にあったあらゆることに見合う言葉が、存在するのかさえ分からなかった。

「離れてから？」

そう繰り返した時、アサミは一瞬明らかな軽蔑の色を瞳に浮かべた。

「離れるって、何のことを言ってるの」

吐き出すように口にされた言葉は、離れるも何も最初から、と後続くように思えた。しかし、彼女は言葉を続けようとはしなかった。瞳に浮かべた軽蔑は文字通り瞬きの合間に消えていた。

「それで、あんたはいつ帰るの？」

しばらく沈黙があった後、アサミが口を開く。彼女と私の会話は、私たちの間にあったはずの時間の積み重ねを無視して、あるいは敢えて触れないようにして進行するのだと、その時ようやく気付いた。私は砂を嘔むようにしばらく口ごもる。

「まだ、分からない」

「そう。あまり長居しない方がよいよ」

そこまで言うと、アサミは突然子供の手を放してその背中を押した。彼女が手を振り払うようにした瞬間、その長い爪が暗闇の中で光った。背を押された子供はよろけて何歩か私の方に踏み出し、戸惑ったように振り返る。

「仕事が終わるまで預かって欲しいの。朝には戻って来るから」

アサミは彼の方を見ずに言った。手を離されたその子は、さっきまでの無表情が嘘のように動揺している。

「アサミちゃん？」

子供は一心にアサミのことを見上げて、私が口にするのと同じ名で彼女のことを呼んだ。それを見てもまだ、私には目の前の子供がアサミの息子であるように思えた。

「ちょっとだけお姉ちゃんと遊んでてね」

ようやく子供の方を見たかと思うと、彼女はもう既に身を翻していた。子供は再び小さな声でアサミちゃん、と口にする。しかしその声は虚しく響いただけだった。階段近くの壁に手を掛けたのが見えた次の瞬間には、彼女の姿はこの部屋から消えていた。ほんの少し風を含んで膨らむプリーツスカートが、私が最後に見たものだった。

朝まで、というのは詰まるところ彼女の仕事が終わるまで、という意味らしかった。この街の人々が皆そうであるように、アサミの生業も鮮やかなネオンの下に根付くものだった。夜が深まると街はさらに騒がしくなり、ネオンの灯りはさらに彩度を増して行く。空は漆黒の布を引いたかのように平坦で、もう雲すら見えない。

子供の名前はルイと言うらしかった。私が尋ねたとき、彼は確かにそう言った。私はその名を何度か口の中で繰り返したが、やはりどこか宙ぶらりんで、目の前の小さな体とは結び付かなかった。

「アサミがいつ頃帰って来るか知ってる？」

私は押入れの中から布団を取り出しながら聞いた。ルイは部屋の隅、外の光が届かない位置にいた。私の方から見えるのは、時折動く形の良いつむじだけだ。

「明日の朝だよ」

彼はこちらを見ようもしない。手元の小さな画面を覗き込む首筋は、夜の暗闇に真っ直ぐ伸びる清らかな白だった。ネオンにも暗闇にも浸食されないその色が、輝きださんばかりに明瞭だった。

私は押入れから取り出した布団を部屋の真ん中に下ろした。ルイが一瞬こちらを見る。

「本当にアサミの息子じゃないの？」

私が彼に聞きたいことは、ほとんどその一つに終始していた。けれど、答えが得られた先でどうすべきなのかは分からない。アサミが自ら産み落とした子なのだと、そういう風に分かってしまったら、私はあの白い首に手を掛けようとするかもしれないから。

「違うよ。アサミちゃんに子供なんていない」

言葉の合間に緊張が走ったように感じたのは、私だけだったのかもしれない。ルイはアサミと同種の冷静さで静かに答えた。

「信用してないでしょ。アサミちゃんの言うこと全部」

彼は私に向き直るようにしてそう言った。こちらを見据える両の目は、十歳にも満たないだろう子供のそれとは思えない厳かさを宿している。

「信用も何も」

無意識の内に発した声は、思いの外低く響いた。信用、という言葉が持ち出された時、私は過去のアサミの顔を思い出していた。私のことを見るときもななく見つめて、しかし助けを求めようとはしない。

「ルイはアサミのこと信じてるの？」

ほとんど駆り立てられるように発した言葉が夜の中に落ちて行く。

「うん」

彼は強く頷いた。その背後で、いくつもの灯りが群れを成すように動いていた。暗闇の中でなお一層輝くような彼の瞳孔だけが、微動だにしない。

私たちの間にそれ以上の会話はなかった。こちらを見つめていたルイは、いつの間にか視線を離していた。

街に響く声は、さざ波のようにこちらに迫って来る。間近にあると同時にどこか遠いことのような感覚があった。ネオンが揺れて色彩の縁がぶれて行く。ここで生きる人々も、揺れ動くそれらと同じように離合を繰り返す。そんなことを何十年も続けて、その積み重ねに呪われて、いつしか誰一人気付かぬ内に暗い底へと沈んで行ってしまおう。そんな想像が、現実のように思われた。

しばらくして、私は畳の上に横になったきり動かないルイに声を掛けた。案の定返事はない。忍び寄るように彼の傍へ近寄ると、皺だらけのシャツに覆われた肩が規則正しく上下しているのが分かった。そっと手を伸ばしてその体を持ち上げると、両腕に確かな重みが掛かる。

眠っているはずの彼は、夢うつつの中でも口を動かし何かを言おうとしていた。小さな唇が水中で息をするように小刻みに動いて、けれど声にはならない。その様は一種の悲しみを孕んでいた。

「二十歳にもなってセーラー服を脱げない人間が、健全なわけがないんだよ」

腕の中の小さな体は、温かくて柔らかい。私が囁くように言った言葉を聞いたら、ルイはどうするのだろうか。

部屋に一つしかない布団は、ほとんど羽毛が抜けて平たくなっていた。抱き上げた彼の体をそっと中に入れるようにして、私もわずかに残った隙間に入り込む。閉じた瞼は薄く、青い血管が透けていた。人肌の熱を近くで感じると、益々アサミのことを思い出す。

私はルイの顔から視線を離して、外に目をやった。街は相変わらず穏やかさもまどろ

みの気配も見せず、嘆きに似た女の声だけが時折聞こえて来る。裸電球すらないこの部屋は、きっとこの街で一番暗い場所だ。

「寝るの？」

突然、横たわる小さな塊がうごめいて声を発した。

「そうだよ。というより、さっきまで寝てたじゃない」

私はその体を抱き寄せるように腕を折っていた。アサミを想起させればさせる程、ルイは私にとって憎くてたまらないはずだった。

「アサミが帰ってくるまで起きてるつもりだったの？」

私はほんの少し俯いて尋ねる。胸の辺りで静かに息をする子供は、利発そうな顔をして目を光らせている。私にはその目が恐ろしいもののように感じられた。私がこの肉体の内に秘めている数え切れないほどの恥を、見透かされてしまいそうで。

「だって、アサミちゃんは寝てないから」

ルイは眠気が覚めたのかさっきよりはっきりとした声で答えた。波打つような布団に覆われて、私たちは互いに触れ合っている部分以外を知覚出来なくなりそうだった。布越しに存在するルイの体は、ある程度は私のそれと同じくらいにグロテスクであるはずなのに、寄り添っている限りではそうは思えなかった。

「私もアサミのこと考えてたよ」

「そっか」

ルイはそれだけ言うと、再び目を閉じた。彼の思うアサミがどんな姿をしているのかは想像も付かなかったけれど、せめて私の思うそれとは全く違うものであって欲しいと思った。過去に私たちが共有していたような吐き気を催す程の熱を、小さな彼にまで知って欲しくはなかった。

「ルイはどこから来たの」

私たちの間には、再び静寂が満ちていた。外の喧騒を打ち切る位に圧倒的な静けさだ。

「アサミといつもどんな話をしてるの」

返事はない。ルイの体が不自然な程熱く感じられた。布団の中で、小さな指が行き場を求めるとさまよっている。

私は目を瞑って、今もこの街のどこかにいるアサミのことを考えようとした。

彼女は淫らで悲しい顔をして、ほとんど吐息のような声しか漏らさない。だからそれを聞き取るために私は耳を澄ます。全ての感覚で以て彼女に近付こうとする。粘膜の痛みすら感じ取れるように、限りなく肉薄しようと試みる。

私が思い出すアサミは、いつも同じ姿をしていた。白い首筋は荒い呼吸に侵され絶え間なく動いている。ゆるく結ばれたスカーフの先が縮れている。彼女の髪を無理やり引っ張る男の姿を、私は遠くから見つめていた。自分自身がどうしてこんなに冷静でいられるのか、そればかりを考えていた。

その記憶の中で、私は体育倉庫の隅にいる彼女の手を強引に引いて立ち上がらせた。そしてその体を両腕で抱きしめる。彼女は何の抵抗もしない。全てがスローモーションのようで、何もかもが信じられなくなりそうだった。アサミの柔らかな体は、私の腕の中に収まるように形を変えた。

うだるような熱を匿いながら、私たちは長い間二人でいた。

「変な所に行ったら駄目だよ。おばさん心配するから、ちゃんと家に帰るんだよ」

私の声は、ほとんどバスケットボールの音にかき消されてしまった。倉庫の入り口の方だけが、目が痛くなるほどに明るい。

アサミのセーラー服は湿っていた。汗なのか、それとも他の何かなのかは私には分からない。ただ素肌のようにしっとりとした薄い布が、私の胸に押し当てられていた。

「大丈夫」

首元でアサミが呟く。彼女はたびたび自嘲気味に、私馬鹿だからさ、と言っていた。そしてそのことを体現するかのように、どんな悲惨なことがあっても大丈夫と繰り返していた。だから私はアサミの大丈夫がひとときわ悲しかった。

「本当に大丈夫なら……」

私はそこまで言って言葉に詰まった。当たり前のように、流れるように出て来るはずだった言葉が、なぜかせき止められた。アサミはじっとしたまま動かない。生々しい肉体を寄せ合う私たちの間で、最早どんな言葉も意味を持たなかった。

私はただ漠然と、彼女は私とは違うのだということを考えていた。この体そのものも、その中で熱を匿っている場所も考えたくない私とは違う。アサミはもう既に、自分の肉体とその内側のことを丸々受け止める覚悟が出来ている。こんなにも薄汚い体を抱えて、死ぬまで生きて行くつもりなのだ。私の耳元辺りに浮かぶ赤い唇は、間違いなく女のそれだった。

彼女に関するものは、感触も、匂いも、舌触りも、全てが濃密で強靱だったはずなのに、記憶は記憶である限り無慈悲に薄れて行く。さらさらと砂が落ちて行くように、一つ一つが細かい粒子となって、形があったはずのものが消えて行く。五感を使って必死に捉えようとした面影は、私の肉体の隙間からすりと抜け出ていってしまう。

目を開くと、視界に入ってきた窓の外は明るかった。

「アサミちゃん、もうすぐ着くって」

ルイが、呟くように言った。彼はいつの間にか布団から抜け出ていた。私だけが入り込んでいるそれは熱の名残すら残していない。二人きりの部屋に、切って落としたように彼の言葉だけが響いていた。どれほどの時間が経ったのだろう。

「そっか」

それだけ言うと、私は起き上がって部屋のカーテンを開けた。注いで来た朝日は身構えていたほど眩しくはない。戸を開けて裸足のままベランダに出ると、ルイもぼたぼたとこちらに駆け寄って来た。

「寒くない？」

「うん」

ルイは一瞬こちらを見てうなずくと、ゆっくりとビールケースに上った。その緩慢な仕草が、危なっかしく儂い子供らしさそのものだった。踏み台に上ってやっと、彼の頭はベランダの欄干と同じ高さになる。

見渡す街は、朝の空気に包まれて異様な程に静まり返っていた。昨夜のネオンは全て死んだように眠っている。取り込んだ空気が肺の底から私たちを冷やして行く。この街であったはずの全てのことは過去になって、後にはもう何も残っていないらしかった。ネオンの下でうごめいていた人も物も、最初から存在などしなかったかのように消え去っ

ていた。

「ねえ、あれ」

少し視線の高くなったルイが、不意に私の脇腹をつついた。

「アサミちゃんだよ、あれ」

横を見ると、彼の黒い目が興奮したように大きく開かれていた。彼が指し示す方、大通りのずっと先に小さな人影が見える。体に合わない大きな深緑の上着を羽織った、アサミの姿だった。

「アサミちゃん！」

突然ルイが叫んだ。ただの一つも音のない街を、一瞬にして彼の声が駆け巡った。

私は反射的に彼の腹を掴むように手を伸ばしていた。身を乗り出せるわけもないのに乗り出そうとするから、咄嗟に両手でその体を押さえようとしていたのだ。一方のルイは、私の手に一瞥もくれようとしな。ただ必死にアサミの方に目を向けている。女のそれのように柔らかな皮膚の感触だけが私の掌に残る。

「アサミ」

私は不意にその名を口にしていた。しかしその言葉を受け取る人間はこの世界のどこにもいなかった。

横にいるルイは、濁りのない朝の日差しを頭から足先まで目いっぱいを受けていた。朝日がこんなにも明るかったことを私はその時初めて知った。

「アサミちゃん、ちゃんと帰って来てくれたよ」

彼は私の方を見ないままだこか満足げに言う。

「そうだね」

私はゆっくりと、けれど素直に頷いた。

日の光は柔らかく降り注いで、ルイの黒い髪に光の冠を被せていた。彼が少し顎を上げると、それも滑らかに形を変える。小さな体に舞い降りた、一種の祝福のような冠だった。それがとてつもなく高尚なものに思えて、私は一瞬直視するのをためらってしまう。

朝日がルイにも、私にも、そしてアサミにも平等に降り注いでいることを、私は不思議な感慨と共に受け止めていた。こんなに明るい光に包まれていたら、ルイだけでなく、私たち皆が健全なものであるように思えた。この身体のどこにも湿った陰りや窪みなど存在せず、恥じるべき部分のない姿で堂々と生きている。そんな風に思えて来るのだ。あるいは、自分が支える肉の生々しさなど、今この時だけでは考えなくても良いようにさえ。

「アサミちゃん！」

ルイが再び叫ぶ。柔らかい指が寒空の下に伸びる。産毛の生えた白い頬が赤く染まっていた。彼は、私の想像よりも遥かに子供だった。

ずっと向こうにいるアサミは、その声に気づいているのだろうか。相変わらず細い素足だけが真っ直ぐに伸びて、上着は上半身を覆い尽くしている。

「アサミ！」

私も真似事のように声を上げた。視界の隅で、ルイが一瞬驚いたようにこちらを見る。喉がほんの少しひりついた。

辺り一帯は目に見える程に澄み切っていて鳥一匹の影すらない。ただ日の光だけが降り注いでいる。私は大通りの向こうを凝視する。寝起きの霞んだ視界が、ようやく鮮明

になって来る。

遠くの小さな人影は、確かにこちらを見て、ゆっくりと右腕を上げた。

舞台上の栄光 / 岩崎 ひのり

舞台上の栄光 / 岩崎 ひのり

舞台上の栄光

フェルディナントは自身を包むじんわりとした熱で目を覚ました。ぼんやりとした意識のまま起き上がると、そこは小さな部屋の中だった。ほとんどの窓がカーテンで覆われているため、全体的に暗い印象を纏う内部で、漆喰を敷き詰められた壁は冷たい。唯一カーテンで半分だけ隠れている窓から射す光で、床が中途半端な温かさを持っているだけだった。

だんだんと意識が明瞭になっていき、フェルディナントは立ち上がった。その時、ふと自分の頭に触れると、大事なものが無いことに気づいた。眩い宝石で飾られた自身の象徴である冠だ。それは華やかな装飾のためにとても重いのだが、フェルディナントにとってはまったく苦じゃなかった。むしろ自分の存在を顕わにする冠は、彼にとっては半身のようなものだ。それが無いとどうにも落ち着かない。

フェルディナントは辺りを見回した。部屋は薄暗く、置いてある家具もどこか寂しい雰囲気だった。しわ一つなく整えられたベッド、二人分の椅子とテーブル、光が当たらない隅のほうに本棚が立っているだけだ。まるで人が住んでいないような場所だ。フェルディナントは気味悪そうに狭い部屋の中を移動する。すると、暗く影を落とした場所から、星のように輝く光が見えた。暗雲が立ち込める星空の部屋に希望の光が瞬いた。それは確かに彼の冠で、光が無いこの場所でさえも輝きを失わずに堂々としていた。

フェルディナントは喜びと安堵の表情を浮かべながら、自身の頭に冠を乗せた。頭から伝わる重さを心地よく思いながらも、フェルディナントは自身がここにいる理由を考えた。彼にはこのような部屋は見覚えが無い。自身の地位から考えて、こんな場所に足を踏み入れたことすら無いだろう。フェルディナントは皇帝だった。いくつもの国を落とし自分の領地として、絶賛国の領土を広げている最中だった。彼はただ指示するだけでなく、自らも戦地に赴いて戦いに身を興じていた。むしろ、軍が誇る幹部たちよりも圧倒的に戦争を知っているようだった。この年の割に幼い顔をした天使のような男は、血塗られた場所では悪魔としか呼びようがなかった。

床にしゃがみこんだまま考え込むフェルディナントだったが、本棚の近くで人の気配を感じた。ぼやけて見える輪郭を凝視しながら映していく。すると、本棚にもたれかかっている人影を発見した。それは薄汚れた軍服を身に纏っている青年だった。整った容姿をしているがどこか儂く、彼の今の姿は薄い霜に覆われているようで長い睫毛が薄い輝きを帯びている。その軍服は間違いなくフェルディナントの国の兵士で、ところどころ服が破れて赤黒い染みがこびりついていた。

なぜ彼がここにいるのか、見当もつかないがフェルディナントは青年に近づいた。もはや生きているのか死んでいるのかさえ分からない。肌を伝う冷気を感じながら、フェルディナントは青年の状態を確認することにした。脈を測ろうと彼の首元に手を伸ばす。しかしその直後、彼の瞼が動く。薄い青色の瞳が闇の中で輝いた。そしてその光は一気に鋭くなり、彼の目は見開かれる。光がフェルディナントを捕らえた瞬間、彼の手がフェルディナントの首を掴み乱暴に床に押し倒した。その拍子にフェルディナントの冠も床を転がっていく。

突然の出来事と首を絞められる感覚に、フェルディナントは一瞬意識が遠のき、視界がぼやけた。もう一度、青年の姿を見据える。彼の瞳は依然として鋭く不気味に輝いていた。暗い部屋の中でその表情は掴みにくいが、彼の手は震え息も荒くなっていた。時々彼の口から「お前は敵か？ 俺に何をしようとした？ 殺そうとしたのか？」と小さく呟きが漏れ出る。まるで錯乱しているようで、青年の精神状態は良いとは言えなかった。

しばらくすると、青年は落ち着きを取り戻し、我に返ってフェルディナントの首から手を離れた。瞳の鋭さも今は和らぎ、美しい瞬きを繰り返していた。

「あ、ご、ごめんなさい。俺、取り乱して、貴方のことを……」

青年は慌てて深く頭を下げながら謝罪する。さっきの地から湧くように恨みのこもった声とは裏腹に、心地の良い低く大人しい声で囁いた。フェルディナントも体を起こして彼に目を向けた。溜息をつきながらフェルディナントも口を開く。

「別に構わない。気にしていないからな。お前、名前は？」

そう聞かれ、青年は顔を起こしフェルディナントを真っ直ぐに見つめる。

「フリッツ、と言います。どうぞよろしく願います」

そう言って彼は礼儀正しくお辞儀をして微笑んだ。ますますさっきとは違う雰囲気の人に、フェルディナントは驚くばかりだった。フリッツの素性がまだ不明なためか、フェルディナントは彼に対してまだ信頼を抱くことが出来なかった。

「ところで、貴方の名前は……？」

「ああ、私か」

と言いながらも、フェルディナントは違和感を抱いていた。フリッツが自分の国の兵士なら、自分の姿くらいは分かるはずじゃないか、と。直接会ったことはなくとも、顔くらいは見たことがあるはずだ、と考えていた。しかし、思考を巡らすよりも名乗るだけなら早いものだ。フェルディナントはフリッツの方を向き、彼の瞳を見つめた。

「フェルディナントだ。……その軍服を着ているなら私のことは分かるはずだが」

少し不機嫌そうに答えるフェルディナント。転がっていった冠を拾い上げ、再び自身の頭に乗せた。フリッツよりも体軀は小さく細いが、その姿は自身に満ち溢れ、皇帝と言うにふさわしい堂々たる姿だった。

だが、その名前を聞いた瞬間、フリッツの笑顔は引きつる。その瞳はどこか悲しげで畏怖をこめた視線をフェルディナントに向けた。「そうか、貴方が……俺らの……」と呟く声が聞こえてきた。

「気づきませんでした。貴方の姿は、俺らの慣れ親しんだ陛下ではなかったのです。なるほど、貴方の本当の姿はそれですか」

どこか棘がある口調だった。まるで憎たらしいものでも見つけて罵っているような感

じだった。彼は優しそうな表情から、どこかやるせなさや失望を込めた顔に変わっていた。フェルディナントは彼の言うことが理解できずに混乱していた。俺らの慣れ親しんだ陛下ではない、悪い冗談のように聞こえたが、それは何を意味しているのか。

「……そんなはずはない。私はずっと皇帝だったのだから」

フェルディナントは戸惑いを隠しながら告げた。自分の冠を自分の証として誇示するように触れる。

「ですが、俺らの知る限りでは貴方はそこまで幼い姿をしてはいない。むしろ逞しい体躯の大男、という感じなのですが。……おかしいですね」

フリッツも何かしら違和感に気づいたのか、腕を組み考える仕草をする。視線は鋭くフェルディナントを捕らえて離さない。今にも射貫かれそうな眼光にフェルディナントは震えた。すると、彼は警戒しながらもフェルディナントに近付く。その目が向けられたのはフェルディナント自身、というよりその頭の冠だった。

「何より、貴方はこんなものを被るようなことはしない。むしろ嫌っていたそうです。……貴方は影武者か何かですか？」

フリッツのその言葉に、フェルディナントは怒りを覚えた。自分にとって大事な冠に対して、自分自身を侮辱されたような気持ちになった。ましてや影武者扱いをされ、自分の存在を否定されたことが悔しかったのだ。

「……いい加減にしろ！ さっきから何だ、お前は！ これは、私が皇帝である証だ。それが何も覆らない事実だ！」

フェルディナントは声を荒げ、フリッツに対して怒鳴った。彼も流石にその態度に気圧されて一瞬怯んだが、フェルディナントをじっと見つめた。互いに見つめあったまま、部屋は何事も無いように静かだった。僅かな窓からの光がフェルディナントを照らす。その光を背に立つフリッツは、フェルディナントには美しい魔物に見えた。今は武器も無く、丸腰の自分には敵わない相手だ、となぜか心に不安が募る。彼に殺されるかもしれない、そんな気持ちが脳内を過ぎった。

「今、なぜ俺たちがここにいるのか、まったく分かりませんが……、これも何かの縁なのでしょう。貴方に、陛下に引き受けて頂きたいことがあります」

フリッツはこう言いながらフェルディナントに改めて向き直る。少しだけ緊張に満ちた顔をしていた。

「どうかこの戦争を終わらせてほしいのです。もう既に戦況は敵国が優勢、こちらの犠牲は甚大なもの。毎日のように、大勢の兵士が命を落とし、民が次々と狙われているのです。……どうか、お願いいたします」

そう言うと、フリッツは頭を下げた。彼は心の底から一刻も早い終戦を望んでいた。戦場で見た景色はあまりにも惨く、灰と血で一面が染まっていく様子は人々の恐怖だった。フリッツはその中に身を置き、自分が壊れていくのを感じた。もう戦う意味は無い、犠牲が増え続けるなら止めにしてしまいたい、ずっと考えていたことだった。

しかし、フェルディナントの言葉はフリッツの予想とはかけ離れていた。「何を言っている……？ 戦況は我が軍の方に傾いているぞ。このままいけば勝てるというのに……」

驚きを隠せないフェルディナントはそう答えた。彼の言う状況とフリッツの言う状況

は正反対で、何が起きているのか互いに分からなくなってきた。

「はぁ……？ そんなはずはないでしょう。今まで俺は、この目で数多くの戦場を見てきました。どこもかしこも凄惨で残虐な結果に終わって、周りに大勢の兵士がいて……」

声を詰まらせ、フリッツは「だから……俺は、貴方を……」とボソリと呟いた。すると、フリッツはふらつき再び壁にもたれかかる。目を閉じて苦しそうに息を吐く。

「お、おい。お前大丈夫か？ なぜそんなに苦しそうにしている？」

フェルディナントは心配そうに声をかけた。発作のように息が荒くなるフリッツの様子は、どう見てもまともとは言い難い姿だった。

「……眠くて、眠くて仕方がないのです。目を閉じて意識が無くなると、その度に嫌なものを見せられる。それでも体が眠気に襲われてしまうのです。……今いる雪の中の戦場ではどうしても」

フリッツは体を震わせた。吐く息がだんだんと白くなり、彼の姿が再び霜に覆われていくようだった。本当に雪の中にいるように姿が変貌していく。フェルディナントは現実味の無いその変化を前に、もう何も考えられない状態だった。この部屋のことも、フリッツの言っていることの矛盾も、何よりこの青年自体が何もかも詳細が分からない。得体の知れない空間で息苦しさを覚える。

「貴方に、もう一度言います。どうか、どうかこの戦争を早く、一刻も早く……」

終わらせてください、そう言い終わる前にフリッツの姿が消えた。雪解けのように、風が彼の姿を消し去ったかのように、瞬きをした瞬間にフリッツは完全に消え失せた。

フェルディナントはしばらく呆然と彼のいた壁を見つめていたが、しばらくすると頭を抱えて無理やり脳内を整理しようと試みた。おかしい部屋の中において、記憶がおかしい青年と会って、今はただただおかしい出来事しか続いていない。自分とフリッツで食い違う発言、目の前で起きた不可思議な現象、唐突で支離滅裂でまるで夢の中にいるようだ。

フェルディナントはやっと自分を納得させる考えを見つけた。これは夢だ、悪い夢なのだ！ そう考えることにした。大体密室に閉じ込められること自体、よっぽどの悪運がなければ自分の立場からしてありえないのだ。そう考えたら、随分と気が楽になった。フェルディナントは安堵の溜息を吐き、自身の頭の上の冠を再び手に取った。この冠がある限り、フェルディナントは自分を証明できる。影武者ではなくちゃんと皇帝として生きている。フリッツの言っていることはもう気にならなかった。あいつも夢の一部、美しく嫌な悪夢の具現化、とでもいうことにした。

不意にフェルディナントも眠気に襲われる。眠りから目を覚ますとこの部屋にいたが、もう一度眠りについたらどうなるのか。フェルディナントはうとうとし始め、冠を大事に抱きしめながら床に横たわった。起きたら元の場所に戻れるように、そう願いながら意識は再び暗闇の彼方へ向かっていった。

「陛下、陛下！ ご無事ですか？」

側近たちの騒がしい声で目を覚ました。戦争の真ただ中、不覚にもフェルディナントは睡眠に意識を奪われていた。彼は寝覚めが悪いような心地で、側近たちの問いかけ

にも適当に返事をするばかりだった。轟音が鳴り響く戦闘の場で、よく呑気に寝られたものだ、フェルディナントは自分を嘲笑した。

身なりを整え、冠を被る。決して離さない自身の象徴を。

「よし行くぞ、お前たち。敵は全員逃がすな」

フェルディナントは目を輝かせ、純粋な子供のように笑みを浮かべる。狂気と呼ぶにふさわしい姿を戦場に晒す。もう彼の脳内では、夢のことなど忘れ去られていた。

少しばかり時間が経った。フェルディナントは再び密室の中にいた。前よりも強い光の熱で目を覚ますと、依然として変わらない部屋の空気を感じた。しかし、カーテンが開いている窓が増えていることが分かった。おかげで前よりは部屋の様子が見えやすくなった。一時期忘れていた夢のことを、フェルディナントは再び思い出すことが出来た。部屋の雰囲気は相変わらず寂しいものだが、フェルディナントは隅にある本棚の中身に興味を持った。

本棚には大量に本が詰め込まれているわけではなく、だからと言って数冊だけというわけでもない。しかし、その棚にあるのは実に様々なジャンルの本で、どれも何度も読まれているのか手垢のような汚れが目立つ。フェルディナントが知る限り、そこにある本は古い時代のものから新しいものまで、有名な書物からマイナーなものまで、幅広い範囲の本が揃っていた。この本の持ち主は相当な読書家なのかもしれない。

しかし、そのどれもが戦争に関わるものだった。戦時下の悲惨な状況を書き、時にタブーを冒してでも、平和を訴えているもの、あるいは逆に戦争を尊い価値あるものとみなし、過激な行動を促すものもあった。持ち主は何を思ってこれらの本を集めたのだろう。フェルディナントは少し思案しながら棚にある本を一冊手に取ろうとした。しかし、その手は何者かの呻き声で引っ込めてしまった。

呻き声がした方向を向くと、そこにはフリッツが項垂れていた。前よりも薄汚れた軍服を身に纏い、まだ新しい赤黒い染みがべっとりつついていた。フェルディナントは一瞬だけ動揺して、彼の姿を見つめた。フェルディナントは彼が夢の世界の人物だと分かっている。自分に害はない、そう言い聞かせてもよみがえるのは首を掴まれたときの記憶だった。そのせいで、安易にフリッツに近づくことを無意識に拒んでいた。

「ん……、あ、あれ、貴方は……」

目を覚ましたフリッツは少しだけ動揺をしていた。立ち上がり部屋の中を確認し、冠を被った男の姿を確認して、深い溜息を吐いた。

「まさか、また貴方に会うなんて思いませんでした……」

バツが悪そうに呟くフリッツ。その目には疲労が浮かんでいて、虚ろな光を宿していた。フェルディナントは彼が襲ってこないことに安心して、比較的落ち着いた声で話した。

「ああ、そうだな。まさか再びお前と夢の中で会うことになるとは」

夢の中……、とフリッツはそっと反芻した。フェルディナントは彼のことをすっかり夢の住人と認めて疑わなかった。だから、ここを夢の中と伝えたが、彼は怪訝そうな目つきでフェルディナントを見つめる。しかし、フリッツはしばらく考え込んだ後に、少

し笑みを取り戻して納得した様子だった。

「そう、ですね。貴方の言う通り、ここはきっと夢の中なのでしょう。そうでなければ、いろいろと可笑的い」

フリッツは改めてフェルディナントの方を向いた。頭の冠を眺めて、フッと声を漏らす。

「やはり、私が見た陛下は貴方のような姿をしておられませんでした。しっかりとした体躯の大男で……、戦争を遊びと考えている傍若無人な最悪な人でした」

自信をもって冷たく言い放った言葉とは裏腹に、その目には深い絶望が織り交ざっていた。それは他人への失望のように、重くのしかかる自責のように感じられる。フリッツの美しい青い目が暗闇へ葬られてしまったようだ。フェルディナントは夢の中とはいえ、目の前の青年を気の毒に思った。自身も戦争を煽る当事者と知りながら。

「……お前の世界に住んでいる『私』は随分とお粗末な奴なのだな」

フェルディナントは苦笑を浮かべながら言う。フリッツも苦しみのこもった笑顔で同意した。フェルディナントは彼の姿を注視した。彼の軍服の赤黒い染みは、上半身を覆うほどに大きかった。

「お前はこの夢から覚めた時、どんな感じだった？」

「えっと……、この夢から覚めた時、私は既にここでの出来事は忘れていたようです。雪中凍え死ぬ直前だったようで。よく生きていたな、と医師の方に言われました。その後は、陛下が何か宣言をしたのです。ええ、戦争をまだ続ける旨を示したのです。……正直に言えば失望しました。もう、彼には何も届かないのだと、そう実感しました。それからあまり覚えていませんが、がむしゃらに戦って、戦って、何者かに撃たれたようです」

フリッツは話しているうちに、何かに怯えるように震えて発作のように息を荒くした。だんだんと浅い息遣いになるフリッツを、フェルディナントは思わず背中を擦って落ち着かせた。なぜそうしたのかは分からない。だが、これが夢のなかであっても、苦しうにして今にも異常事態に陥りそうな彼をほっとくことがなんとなく憚られたのだ。

「はぁ……。大丈夫です、もう平気です。ありがとうございます」

「別に気にすることはない。お前は少し休んだ方が良い」

「ええ、そうですね。……やはり貴方は、陛下なのでしょうけれどあの方とは違います。こんなに優しくはしてくれませんから」

フリッツは寂しそうに笑いかけた。その笑顔が疲労を感じさせ、彼が限界を迎えかけていることを暗示させた。

「前までは眠ることが嫌だったのに……。今ではこの夢を見ていると、心地よい気分になるのです」

フェルディナントは心が抉られるような心持ちだった。自分ではない自分がフリッツを苦しめていることが、フリッツだけでなく彼の住む国自体を巻き込んで好き勝手に暴れていることが、聞くに堪えない惨状だった。思わず耳を塞ぎたくなる。

「それなら……」フェルディナントは思わず口をついた。

「私がお前の話し相手になってやろう。お前の感じること、現実で言えないこと、全部吐き出してみろ。……そうすれば、お前の心も少しは軽くなるのではないのか？」

ここでは暇つぶしもまともに出来ないからな、とフェルディナントは少し目を泳がせ

て言う。勢いで口にしてしまったことだった。それがフリッツの現実を解決する要因にはならないにもかかわらず、それがいい方法だと思ったのだった。

フリッツも最初は呆然としていたが、やがて吹き出して笑った。それはやつれた笑みではなく、心からの笑いだった。

「そんなことを言うなんて、思いもありませんでした。ふふっ、私は勘違いをしていたようです。貴方は本当に優しい人だ」

彼は心を落ち着かせ、部屋には和やかな雰囲気がかかった。以前の夢とは全く正反対だった。フェルディナントもようやく息を整えて、彼の姿を目に映した。

「そうか。そんな風に言われたのは初めてだ。ああ、あとは私のことを『陛下』とは呼ばなくていい。そうだな……、フェルディとでも呼んでくれ。」

「分かりました。では、フェルディ。よろしくお願いしますね」

フリッツは笑いながら、彼の名前を呼んだ。心なしかフリッツの態度は少しくだけた印象に変わっていた。凍り付き壊れかけた心を一時的に癒すことに成功した。二人の距離は以前に増して近くなっていた。

フリッツは嬉しそうな様子を見せているが、フェルディナントは心が陰るばかりだった。今の自分は会ったこともない自分がした行いの罪滅ぼしでフリッツに話しかけているのだ、と。夢の世界の住人と思っていたが、どうにもそんな風に見えなくなってきていた。もし彼が壊れてしまったときに、自分には救えなかった、これは仕方のないことだった、自分は最善を尽くそうとした、と逃げ道ばかり作っている。光と闇の部屋の中で、どうして彼は闇の中にいなければいけないのか、そんなことを考えてもどうにもならないやるせなさがフェルディナントを覆い、冠の重さを感じさせた。

それから、彼ら二人は夢の中で頻繁に会うようになった。お互いの住む世界も知らないが、二人は気にせず会話をするのだ。

フェルディナントの提案通り、フリッツはずっとひた隠しにしてきたことを話した。家族のこと、友人のこと、好きだった人のこと。どれも皆、今はいない誰かのことであった。時に戦争を忌避し、彼の世界の皇帝を口汚く罵倒した。フリッツが話すのは、陰鬱で辛い現実を嫌でも想起させる。フリッツは時々声が震え、過呼吸になり、吐き気を催す時もあった。フェルディナントはその度に彼を慰め、落ち着かせた。彼の弱り切った姿から発せられる憂いを、一切耳を塞がず正面から受け止めた。

フリッツは大抵平静を取り戻すと、「ありがとう、フェルディ」と言って、脆くて優しい笑みを浮かべるのだった。半分以上の窓のカーテンが開かれ、すっかり陽光が部屋内を照らしていた。唯一本棚にはまだその恵みは注がれていないが、彼らが向かい合うテーブルと椅子には光が当たり、じんわりと彼らの熱を上げていく。窓からの光を受けて笑うフリッツの顔は、穏やかで美しいものだった。

フェルディナントは少し笑いながらも、その心は曇り切っていた。フリッツの話を知っていると、いかにあの世界の自分が愚かであるかを思い知らされる。しかし、自身も戦争を起こしている身として、あれを忌み嫌い責め立てる資格はないのだ。フリッツがどれほどあれを恨み、あれを妬んでいるかは十分に分かった。フェルディナントは、あ

あはなるまい、と誓いを立てることで彼への共感を表した。しかし、これらが「この室内で起きた出来事」というのが、さらにフェルディナントを悩ませた。

「貴方という夢のことを、現実でも思い出せたらいいのですが……」

フリッツは悩ましい様子で、小さく呟いた。彼の言う通り、二人はこの夢から覚めると、この室内でのことを全て忘れ去ってしまう。フリッツが吐き出した鬱憤も再び彼の中に取り込まれ、フェルディナントが立てた誓いも目覚めれば忘却に置き去りにされる。そうして二人は何もかも覚えていない状態で現実を生きていく。また微睡の中に沈めば、ここでの記憶を全て取り戻し再び会話を始めるのだ。フェルディナントが提案した会話はフリッツの現実への解決には至らないことは知っていた。それでも実行に移してしまった結果、逆にフリッツを虚しさに閉じ込めただけなのではないか、フェルディナントはそう考えてしまうのだった。

フリッツは彼の陰りを察して、困ったように笑って瞳を見つめた。

「貴方が気に病むことはありませんよ。仕方のないことです、これは夢なのですから」

フリッツはこれを夢と割り切り、現実で救われることをもう期待していなかった。ただ、少しでも自分の痛みを和らげ、気持ちを楽にさせるひと時を欲していただけだった。たとえそれを現実で忘れてしまったとしても。彼の体は日に日に衰え、血の気を失っていく。美しかった青の瞳はもうすっかり光を失い、生気を感じられない。

「しかし、お前はこんな戦争をしたくはないのだろう。家族と暮らして幸せに過ごしたかったのではないのか？」

「そうですね。しかし、それももう叶いませんから。……貴方のせいではないですよ」

「しかし、あの世界の私が起こしたことなら……」

なおもフリッツの言葉に反論しようとするフェルディナントに、フリッツは呆れたように見つめると、突然立ち上がり彼の頭の上の冠を奪った。

「な、何をする！ 返せ、手を放せ！」

フェルディナントは焦りながら、フリッツの手に持つ冠へ手を伸ばす。しかし、彼はそっと避けて冠をじっと見つめた。するとすぐに笑って、フェルディナントの頭に乗せた。

「頑固な人ですね。別に俺は貴方に責任を押し付けたいわけではないのです。生きている世界が違う以上、関わるができないのならどうしようもないじゃありませんか」

フリッツは切なそうに告げると、再び椅子に腰を下ろした。

「俺のことを心配してくれているのはありがたいです。しかし、フェルディ。俺は貴方のことも心配ですよ。ここ最近、何かに迷っているようで……」

フェルディナントは黙り込んで、頭の冠をそっとテーブルに下ろした。煌びやかで豪華絢爛、皇帝の印であるそれは陽光にも劣らず光を放っている。しかし、それを見下ろすフェルディナントの眼はいつもの恍惚な視線とは違っていた。

「……私は、何のために戦争をしているのか分からなくなってきた」

ぼつりとフェルディナントは話し始めた。

「お前と話していて分からなくなった。私は領土が欲しかったのか、戦いを楽しみたかったのか、……血に塗れた敵を見たかったのか。この冠が私を皇帝に至らしめるものなら、私が今までこの冠に縋り付いていたのは？ ……それは権力のせいかな。私の身勝手な行

動を実行するために、この冠の力を使っていたということか。……だから手放せないわけだ」

フェルディナントは静かに声を発していたが、だんだんと言葉に焦りや興奮が混じり、瞳が葛藤で揺れていた。口角をあげ、自身を嘲るように笑う。

「私は一体なんなのだろう？」

フリッツは向けられたその瞳を完全に理解することは出来なかった。しかし、フェルディナントが抱えている煩悶を感じ取った。フリッツが持つ鬱屈した感情と同様に、彼も悩みを募らせてきたのだろう。

「貴方は『フェルディナント』ですよ。紛れもなく。けれど、俺の世界のフェルディナントではない。同じ名を持つ赤の他人です。素性の知れない一軍人のために出来る限りを尽くそうとする、頑固で優しい方です」

フリッツは温かな眼差しを向けて言った。警戒心の欠片もない安らいだ笑顔だった。

「最初は子供っぽい方だと思っていましたが、貴方はしっかりとした意思を持っています。俺は貴方に感謝しています。たとえ夢の中でも、無情な世界でこんなにも良くしてくれる人に会えて……」

フリッツはあまりにも穏やかで美しい微笑みを浮かべた。窓からの光が彼を包み込み、青白い肌がますます白く映る。その輝きがますます彼を儚い存在に変えていく。そうして瞬きをしているうちに、フリッツは消えてしまった。また、彼は自分の世界に戻ってしまったのだろう。

フリッツの眼差しや表情、そして告げた言葉を思い出しながら、フェルディナントは違う、違うんだ、と否定した。自分がしたことは優しさじゃない、独りよがりの偽善だ、と。フリッツの世界の皇帝が自分とは違うとしても、まるで自分が責められているかのように感じた。彼を現実から救えないことは知っていた。夢から覚めたらまた戦争が始まることも知っていた。だからせめて夢の中で、その罪悪感から逃げるために、彼を失望させないようにしたかった。

フェルディナントはもうフリッツを脅威とは思わなかった。むしろ、彼の純粋さが一種の危うさを孕んでいることを気にもんでいた。いずれ彼は現実を忘れるために、自らに手を下すかもしれない。命が絶たれることを何も気に留めていない。むしろ、今の彼は天からの迎えを待つ純粋な子供のようにしか見えなかった。フェルディナントは彼の純真な瞳が、自分を突き刺し自身の汚れた部分を浮き彫りにするようだった。フェルディナントは深く溜息を吐き、テーブルの上の冠を見つめた。なぜこんなものが自分の手元にあるのか。なぜ手放したくないのか。もはや考えるのにも疲れてきていた。

不意に小さな物音が聞こえた。本棚の方から聞こえたのは、本が倒れる音だった。フェルディナントはそういえば、と思い本棚に近づく。フリッツと話すようになってから、結局一冊も本の中身を見ていないことに気づいたのだ。相変わらず戦争の本がたくさんあった。てきとうなものを何か読んでみようか、と本棚を眺めていると、一冊のノートが目に入った。それはだいぶ前に使われていたものらしく、埃を被って奥深くに眠っていた。これを書いた主の名前は、消えそうなくらい薄くペンで『ミーナ』と書いてあった。

フェルディナントは好奇心が勝ち、そのノートのページを捲った。何となく真実の扉が開かれると思ったのだ。そして、そのノートの内容を見て、フェルディナントは自分

に納得した。

「そうか。そういうことだったのか」

フェルディナントは乾いた笑い声を出した。真実を照らすように太陽の光が本棚に注がれていく。彼はこの部屋のことを、フリッツのことを、自分のことさえも、何一つ理解できていなかったことを理解した。

どれくらい時間が経ったのだろうか。フェルディナントは光の眩しさに目を覚ました。机に突っ伏して眠っていたようで、冠が雑にテーブルの上に転がっている。本が数冊置いてあり、どれも読んでいる途中のまま放置されていた。フェルディナントは読書の合間に意識を失ってしまい、現実に戻ったのだった。

フェルディナントの住む世界では、戦争が終わりを迎えた。結果的に大勝利を収め、目的は果たされた。また一つ領土を増やすこととなり、国中が熱狂の渦にあった。フェルディナント自身も大声を上げて勝利を共に喜んだ。しかし、夢の世界を訪れば歓喜の波は空虚さに覆われる。なぜあんなにも馬鹿みたいにはしゃいでいたのか。この夢の中に入ると妙に冷静さを取り戻したようになる。フェルディナントは冠を掴みテーブルの上に立たせた。宝石が散りばめられて星のように輝いていたが、その眩さも太陽の光には敵わないようだった。あんなに美しかったはずなのに、今ではひどく色あせた輝きしか見えない。

フェルディナントは頬杖をつき、煩わしそうに空を見た。窓から見える外の世界はとても澄み切っていて空気の清浄さが伝わってくる。煙も爆発も無く、灰色に濁った空は見えない。そんな世界はきっと素晴らしいことだろう。しかし、フェルディナントにとってそれはただの憧れでしかなかった。彼の現実にはきっと訪れることはない。

ふと、誰かが来る気配がした。振り返るとそこにはフリッツがいた。温かな光に包まれ、瀕死の状態で床に倒れていた。片目が潰れて、包帯が巻かれていても血が染み込んでくる。右腕は半分がもげた状態で、血が溢れ出ている。他にも血や汚れで軍服はかつての清廉さを無くして、フリッツはすっかり弱り果てていた。しかし、それでも彼の美しさはまだ残っており、薄く開かれた瞳は淡い光を宿していた。フリッツはフェルディナントの方を見ると、優しく微笑み返し、途切れ途切れに言葉を発した。

「あ、はは。フェルディ、見苦しい姿を、晒してしまいましたね……」

フリッツは自嘲的な笑い声を発して無理やり起き上がろうとした。フェルディナントはそれを制止し、フリッツを横たわらせた。その姿に焦りはなく、ただ真っすぐに彼を見つめていた。フリッツはテーブルの上に目を向けた。

「ああ、貴方も、この本を読んで、いたのですね」

「お前がいなくて退屈していたからな。……お前はずっと知っていたのか。この部屋のこと、私やお前自身のこと」

フェルディナントからの問いにフリッツは僅かに首を上下させる。悲しそうな瞳で彼を見つめ返す。

「貴方と初めて会って、しばらくしてから、読んでみたのです。中身を見たときは、本当に驚きましたよ。だって、俺たちがこんな風に、ここにいられたのは……」

すると、フリッツは血を吐いた。彼の体はもう限界をとっくに超えていた。残された時間は少ない。助かる見込みも無いだろう。

「もういい、もう動くな。お前は……、もう遅かった」

フェルディナントは段々とフリッツの血で汚れていく。それを気にせず、彼を静かに横たわらせて様子を見守った。

「ごめんなさい。もう俺は、ここまでのようですね。……貴方と会えたことは、本当に不思議な結びつき。きっと二度と、貴方とは会えないでしょう、けれど、最後に一目姿を見られて、良かった。貴方には、感謝しても、しきれないのです」

声の上擦り、苦しみが憑いた声を出すフリッツは、フェルディナントの手を握った。もう十分に開くことが出来ない瞳から、涙を零して「ああ、でも」と最後にこう言った。

「貴方のいる世界で、生きてみたかった」

フリッツの声が宙に消えた瞬間、彼の姿は最初から無かったように消失した。広がっていた血の跡も消え、何も無くなっていた。それと同時に本が閉じられる。ある若い軍人の一生を書いた小説だ。フェルディナントはそれを手に取り、「今まで、ご苦労だった」と彼を労う言葉を伝えた。辿り着いてしまった真実。ここは夢の世界などではなかった。二人にとってはそうかもしれないが、彼らの『物語』を知る人物たちには現実と呼べる世界だ。

彼ら二人は本の登場人物だ。いずれも戦争の中を生き、まったく真逆の人生を送る主人公たちだった。フェルディナントは絵本の主人公だった。その絵本は皇帝フェルディナントの栄華を簡単にまとめたものであり、彼を賛美する内容がたくさん盛り込まれていた。絵の特徴として、幼く美化された皇帝が戦う様子が描かれており、その頭にはいつも冠を被っていた。

一方、フリッツは戦争小説の主人公で、残酷な争いの世界を生きる青年だった。挿絵こそ無いものの、文章の描写からフリッツの姿と一致する。彼は幼いころから戦争を経験し、大切なものをたくさん失い、最後には自分さえも見るに堪えない結末を迎えてしまう。この小説の皇帝『フェルディナント』は暴力的で残虐、悪行塗れの最低な人物だった。暗に皇帝のことを非難する内容が、この小説には含まれていた。

これらの本の持ち主であった『ミーナ』の日記からもっと詳細なことが分かった。ローズマリーの葉で挟まれていたページだ。

『今日もまた本を手に入れた。一つは絵本。かの皇帝陛下が主役の作品。彼をとっても称える内容みたいだけれど、子供たちを洗脳するつもりかしら？ もう一つは小説。これはフィクションである軍人の話みたい。これにも皇帝陛下は出てくるけど、ほぼ禁書みたいな扱いされていたから過激な内容みたいね』

ミーナはやはり読書好きで本をたくさん取り寄せていたようだ。日記には大抵本に関連することばかりが書かれている。しかし、その日記も唐突に終わりを迎える。最後に記されていたのはこんなことだった。

『あの二つの本を読んでみた。絵本の出来は上々ね。絵は綺麗だし、内容もスツと入ってくる。だからこそ困る。今、この国ではこんな内容しか流行っていないから、みんな皇帝陛下に騙されているわ。ただのプロパガンダじゃない。小説の方は最初の描写はいいけど、後半から少し支離滅裂になっているわ。それもフリッツの精神状態の悪化みたいで悪くはないけれど、読みにくかった。けど彼の最期の場面は良かったわ。膨張はされているけど、皇帝陛下は相変わらずクソ野郎だし、ろくでなし。この作者、国に殺されたっていう噂があるけれど本当かしら？』

ミーナの率直な感想文が述べられているが、最後はこんな風に締められていた。

『私も今日この国から出ていかななくてはならないの。亡命生活で本が読めなくなるのは寂しい。全部は持っていけないから、戦争の本はこの家に置き去りね。あの二冊も含めて。名残惜しいけどさようなら。この日記も名前を何とか消して、分からないように眠らせておく。バレたら粛清の対象となるけれど。最後に、恨み言を一つだけ書かせて。皇帝陛下、私は貴方を許さない。こんな戦争の中で、暗い話しか無いなんて最悪だわ』

日記はここで終わった。最後に書かれた文章の文字は特に激しく荒々しかった。その後のミーナの行方は分からない。しかし、いかにミーナが皇帝への、『フェルディナント』への恨みを抱えていたか分かる。フェルディナントはこの現実でも生きていた、最悪な存在として。もう生きてはいないだろうが、彼が残した傷は大きすぎた。現にこの無人の家が物語っている。彼は椅子にもたれかかり、深く息を吐いた。ここまで読んで何も良い感情を得ることは無かった。

一つだけ安心したのはフリッツの最期だった。彼の下に家族や友人、恋人が迎えに来て空へと飛んでいった。そんな幸せな夢を見たそうだ。最後が自分ではなく、しっかりと愛した人を考えていてくれたことが嬉しかった。もう一切、彼が自分を忘れて天国で生きていることを、フェルディナントは願わずにはいられなかった。フェルディナントは窓の景色を見る。相変わらずの美しい空と太陽の光。まるでフリッツの瞳のようだった。

「なあ、『フェルディナント』」

彼は、現実には『彼』に問いかける。

「お前は、冠を手にして満足したか？」

その声は虚空に放たれ、絵本の閉じられる音とともに消えた。部屋には本が数冊残されただけだった。

遊覽 / 和槻 泉

遊覧 / 和槻 泉

遊覧

街灯に照らされたベンチの上に、鱗翅目の死骸が二つ転がっていた。一匹はか細い神経に翅をゆらゆらと動かされ、もう一匹は白い毛に覆われた腹を夜の空に向け、両の翅を木製のベンチに張り付けられたように動かなかった。

蛾なのか蝶なのか分からないのは、すらりとした体躯とは裏腹に、双眸をくり抜いたような模様をしているからだ。この模様が無数の小さな鱗粉によって彩られているのは何だか不思議な感じがした。色彩を全て水で洗い流して透明の翅にしたのなら、どんな光も通して艶やかな生き物になるのだらうと確信し、二匹が太陽を背に、その翅を必死で動かす姿を想った。

僕はそんなことを考えながら翅が動かなくなるのを数分間の観察のうちに見届けた。

頼りない灯りがポツンとあるだけ、風も吹かない信濃川の河川敷には薄いランニングウェアを着た老夫婦以外通らない。坂には数十種類の短い植物が繁茂していて、下を流れる河川は冷たく、実は汚い。昼に流れる水は濁り、腐ったような色をしているが、夜は鈍い銀紙が薄く張られ、乱れながら月光を反射している。それは人々の感情とは逆さまに流れていて、厭世的な気分させる。

遠くから車や人々の喧騒が鼓膜を揺らす、感情はすぐに霧散する。

僕はベンチに座りたかったが二匹の死骸をどかすのは憚られた。なので街灯に群がる虫が落ちてこないよう、ベンチの横に座ることにした。臀部に何やら感触を感じ、虫を潰してしまったのかと、背筋にどろっとした汗が流れたが、目を丸めて持ち上げてみるとただの小石だった。僕は肩の力を抜いて足を抱えて座った。

「一人でも楽しそうね」

ベンチの端にある階段から^{ゆめのやよい}夢野弥生が顔を覗かせた。彼女が階段を上る仕草は特徴的で、上半身をぷらぷらさせて死神のように歩く。服装は黒で統一されており、更にそれっぽく見えた。デニムと幅のあるTシャツは彼女の白い肌を強調し、一見病人にも思える細い四肢を隠していた。

「別に楽しんでなんかないよ。そのせいでベンチに座れなかったんだ」

僕は顎を動かしてベンチの上の死骸を指し、夢野は視線を僕の方には向けずに話した。「貴方、コレ触れないの。蝶かもしれないでしょ」

正直どちらでもよかった。僕はそれよりも動かなくなった死骸に触るのが嫌だった。僕が触れた瞬間に指先の生命力や熱やらを吸い取って急に動き始めるのではないかと思ったのだ。指の関節がぎこちなくなったので指を交互に組んで力を入れた。

「そういう問題じゃない」

そう。夢野はそっけなく答え、思いついたようにベンチに手を伸ばした。手元は横の手すりに重なって、よく見えなかったが、ゴミでも拾うように、ひょいと死骸を一匹手に取った。翅を広げたそれは彼女の中指の先から手の甲くらいの大きさだった。

僕は彼女がこちらに投げるのではないかと、どきりとした。そんな表情を読み取った彼女は、鼻で笑った後、得意そうに聞いてきた。

「蝶か蛾か確かめる方法知ってる？」

そう言って夢野は翅を持って、ぶらぶらと死骸を揺らした。はらはらと落ちる木目の細かい^{こんじき}金色の鱗粉は窓の光に照らされる埃のように舞っていて、彼女の指をべったりと汚していた。

「知らない」

僕はできるだけ動揺を悟られないように反射的に答えたが、そんなことはさして気にしていなさそうだった。夢野は手に持った死骸を少し高くした。

「まず蝶と蛾の定義ってたくさんあるの。昼に飛ぶのが蝶、夜に飛ぶのが蛾。翅をたたんで止まるのが蝶、広げて止まるのが蛾。蝶は綺麗で蛾は汚い。とかね。でも実際はそれぞれに例外がある。夜に飛ぶ蝶だって、翅をたたむ蛾だって、綺麗な蛾だっているの。そもそも蝶と蛾を区別しない国もあるしね。だから蝶も蛾も同じだと言われればそれまで。だけど私はそのどれもがしっくりこない」

僕は彼女の知識の半分も頭に入っていなかった。意識の殆どを彼女が手に持っている物の不気味さに削がれてしまう。

「随分詳しいんだね。じゃあ君の中の定義はなんなの。その死骸を切り開いて内蔵がどうのこうのとか言うの」

夢野はニヒルに笑って違うと答えた。風が吹いて短い髪が顔にかかったので、彼女は空いた手で耳にかけた。彼女の指はやけに長く見え、華奢、というにはあまりにも健康さに欠けている。街灯に群がる何匹もの昆虫や鱗翅目が彼女に影を落とし、優艶を引き立たせているような気がした。

「食べるのよ」

「こうやってね」

そう言う夢野は両手でゆっくりと両の翅を一つにし、根元を人差し指と親指で押さえた。そして反対の手で翅を千切り始めた。断末魔が聞こえたような気がして、顔を歪めたのが自分でも分かった。しかしそれはピクリとも動かず、ただただされるままになっていた。彼女の動きはどこか説明的で淀みなかった。彼女は大きな生き物で、彼女よりも小さな生き物は決して彼女に逆らえない。僕は酷く小さな生き物になった。

「フフ」

「貴方の顔。傑作ね」

彼女は翅を縁取る固い繊維をぶつんと切り、芋虫に翅の残骸が刺さった物を、子供がおもちゃに興味を失ったように固いコンクリートに捨てた。

…………とぼ。

内部に水分を含んだ柔らかい物が落ちる音がした。

彼女は濡った翅をベロの上で溶かすように口に入れた。最初は餌でも舐めるように口

をもごもごとしていたが、次第に咀嚼の動きに変わっていき、最後は喉が膨らんですぐに口から無くなった。

彼女は吟味するように俯いて、吐息を漏らした。僕は彼女の腹から、わらわらと翅が湧き上がり、地面に打ち付けられた胴体が這いずって彼女に同じ痛みを与えるのではと思った。しかし彼女に変化はないし、微妙に動いているように見える胴体は僕の錯覚だろう。

「君的にはどっちだったの」

顔を上げた夢野は先程のように口角を歪ませ、挑発する眼で僕に視線を合わせた。

「貴方も食べてみれば分かるわ」

僕は半分予想していた言葉に対して拒絶することができなかった。いつもならば彼女の奇矯に興味のない振りができていたし、言葉を返さないことも多かった。それでも今日は彼女の絡め取るような視線から逃れることができないのだと直感した。

「もう一匹で確かめてみなさいよ」

夢野はベンチに伏した一匹を下から弧を描くように僕へ投げた。恵みを貰うように合わせた両の手のひらに落ちたそれは、もこもことしていて全身の毛穴が裏返った。

「まずは翅を切って」

彼女はエスコートするように手順を話していく。僕は先程彼女がしたように死骸を解体していった。繊維を千切る振動が血管を伝って、指、背骨、首筋、の順で脳にまで届く。時折吹く寒くもない風や草木の揺れる音がやけに大きく聞こえ、五感、特に触覚が鋭敏になっているのが分かる。

「はい。後は口に入れて味を確かめるだけよ」

「飲み込まなくてもいいんでしょ」

「確かに蝶か蛾か確かめるだけなら飲み込む必要はないかもしれないけど、それってとても失礼なことだと思わない？ 私が食べられる側だったら吐き出された後、そいつの不幸が訪れるまでずっと追い回すわ。そして不幸に見舞われたら思いっきり笑ってやるの。あたかも私がその不幸を引き起こしたみたいだね」

「唾液まみれで？」

「そう。汚ったらしく」

僕は深い溜息を一つと短い呼吸一つで心臓を落ち着かせた。地面の幾何学的な、がらんとした死骸の眼がこちらの隙を伺っている気がして一度下を見たが、夢野はじれったそうにそれを足でどけた。

僕は生唾を溜めて翅を口に入れた。出来る限り舌の細胞と翅を触れさせたくなかった。

夢野は愚かな生き物を観察するように顔を傾けて僕を見ていた。髪が斜めに揺らめいて、整った耳が見え隠れした。

風、街灯、川音。口以外の全ての感覚に縋ったが、すぐに体は口内のざらざらとした感触と生っぽい異臭のする鱗粉に支配された。

僕は逆流に耐え切れず、口の中のものを胃の内容物ごと全て吐き出した。視界が滲んで息がしづらかった。食道が狭くなって、締め付けられる感覚が残る。どうすればこの気色の悪い残滓が消えるのだろうか、頭蓋の中の熱が考える。しかし仄暗い河川敷はどこよりも低い場所にあつて、何もかもを許容していた。

夢野は涙目になりながら僕を見下ろして、けらけらと笑っている。

「まさか本当に食べるとは思わなかったわ」

夢野は後ろに隠していた手から、先程彼女が食べた翅を見せびらかすように揺らした。恐らく僕に食べさせるためにかなりの時間を使って練習したのだ。にやにやと。

このクソ女。

僕は体中の細胞に蓄えられた小さな憎悪を両眼に集めて睨んだ。しかし彼女は飄々として僕と対極の感情を浮かべた。

「これじゃ貴方が可哀想過ぎるわね」

横目で笑った後、今度は本当に口に入れた。彼女の悠然とした動作が、僕の脳裏にこびり付いた映像と二重写しになった。薄まってきていた口内の感触が鮮明に湧き上がる。もう空だと思った胃にはまだ何かしらが残っていたようだ。

「蛾ね。これ」

夢野は呆れた声で言った。

ここを通る人に申し訳ないと思い、今度は草陰に吐いた。

僕はコンビニで百十円の水を買って、半分を一気に飲んだ。空になった胃には些か冷たすぎると思った。腹の中心に体温が移動していくのが分かる。

夢野は新作だというアイスをしゃがんで少しずつ齧っている。僕は彼女が食べ終わるのを待った。途中で一口いるか聞いてきたので言葉に甘えて彼女の一口と同じ大きさを齧った。舌をゆっくりと刺激する甘味はつい今しがたの出来事を遙か昔の記憶にしてしまった。彼女はそんなにおいしそうに食べるならと残りの全部を渡してきたが、いらないと言った。

それから彼女と暫く会話を交わさなかった。視界を遮って歩く人々を眼で追ったり、家庭や職場での境遇を勝手に想像したりした。この手の想像で明るい物語を作れた例はないが、僕はそれで満足だった。

彼女が棒に付いた最後の一欠けらを器用に食べたので、ゴミを捨ててから新潟の街を歩き始めた。

二十一時を過ぎたあたりから大通り沿いの店は灯りを消していく。会社員が駅に向かったり、僕と同じ高校の制服を着た男女が静かに背徳感を味わったりしている。ガラス張りのショーウィンドウにはワンピースと小さなカバンを身に付けさせられたマネキン人形が佇んでいた。二十一時半にはホテルの所々から小さな光が漏れるだけになる。その灯りを見ると本当に部屋に人がいるのか分からなくなる。この、今にも崩れて降ってきそうな人工物の塊の中に人がいるのだ。夜になるとあらゆるものの現実味が無くなっていく。

僕は流れる街の景色を視界に入れながら右側の狂騒に耳を傾ける。

この街は昼と夜で光の強弱が逆転する。昼は開けた大通りが太陽の寵愛を一身に受け、人やら経済といったものを循環させる。反対に酒場や風俗店などが並ぶ細道には隠し切れない、でろっとした雰囲気立ち込め、どこに行くでもなく存在している。夜になると細道はその嫉妬を隠そうともせず、卑しい灯りをまき散らすのだ。上手く生きられな

い人々から垂れ流される不満や怒り、濁り水に口紅を溶かしたような色のネオンライト、鼻腔を突くアルコールと煙。それらが一緒くたに、ぐちゃぐちゃになって濃淡を作りながらその場所を包み込んでいる。

僕達は酒場の提灯から漏れ出す橙黄色を浴びて、キャッチやら怪しげな外人やらを無視して歩いた。夢野は話しかけられるたびに歩調を早めてスラスラと人混みを抜けていく。僕はただ表情を漏らさないように彼女の後をついていった。彼女の眼に留まらない人々はそんなことには慣れっこであるようで、あちらこちらに後腐れなく声をかけて回っている。油断すると彼女と逸れてしまいそうだったので、視界の中心に彼女を置き続けた。

悪路を抜けると人通りは減る。駅はまだ終電の時間ではないので閑散として涼しそうだった。目の前の緑に点滅した信号の先には、昼に走ったバスが屋根付きのターミナルで明日の労働に備えている。右折してずっと歩いた。喧騒が残響なのか本当に後ろから聞こえてくるのか分からなくなったところで彼女は前を向いたまま話し始めた。

「貴方って家族はいないの」

「いるよ。母親だけだけど」

「夜の仕事をしている人？」

「うん。でも昼も働いているから、バイト先でそのまま寝て帰って来ない日もある」

「だからあなたの家って誰もいないのね。沢山働いているのは貴方のため？」

「……多分。……いや、絶対そうだね……」

彼女は咳か微笑か分からない音を出して振り向いた。

「嫌なこと言わせちゃったわね。ごめんなさい。それでお父さんはどうしているの？借金作って逃げたとか、酒飲んで暴れたから二人で殺しちゃったとか？」

僕は不意を突かれて笑った。彼女の遠慮のなさが気持ち良く、口が軽くなる。彼女も笑って、また前を向いて歩いた。

「借金なんて作ってないよ。普通に死んだだけ。死因は聞いてないから今も分からないけど。小さい頃にさ、父さんが朝になっても起きてこなかったから、僕が父さんの部屋に起こしに行ったんだ。母さんに言われて。そしたら父さん、真っ青になって死んでた。でも死んでいるっていうのがその時は分からなくて、色々話しかけたりしたんだ。『お仕事遅れるよ』とか『ママが怒ってるよ』とかね。それでリビングに戻って母さんにパパが起きないって言ったんだ。それで母さんと二人で見に行って。そしたら母さん『あなた！あなた！』ってずっと父さんのことを揺らして叫ぶんだ。僕はそれが怖くて、大声で泣いたのを憶えてる。だから正直父さんが死んだってことよりもその状況が怖かったって印象の方が強いかな」

僕は息をついて自分の肩が随分と上がっていたことに気付いた。屹立したビルの通りを抜けて、夜の純度が増してくる。目の前に伸びる一本道が人間の足では到底進み切れないような長さに思えるが、すぐに終わりがくることを僕は知っていた。

「貴方って見かけによらずドライよね」

「そうかも」

僕は自嘲気味に答えた。彼女との距離が少し縮んでいたのので、僕は歩調を緩めた。

「ま、そのお父さんが死んだおかげで私達は場所に困らずできているんだから、感謝

しないよね。貴方の部屋狭いけど」

「広い部屋は落ち着かないよ」

「それもそうね。あのこぢんまりとした感じ、結構好きよ。貴方のに似て」

「僕も君の血色と発育の悪い体が好きだよ」

「貴方って気持ち悪いこと言うのね。嬉しいけど」

僕は裸の彼女を想い、この会話がいつまでも続いて、太陽なんて昇らなくていいと思った。僕の家に着いたら、音のない部屋で交わって、朝まで眠る。その時の僕達は他の何処にも繋がってなくて、澄んだ透明の空気によって断絶されている。日が昇れば、否応なしに生かされ、正される。今はただ蛍光灯のような世界を堪能し、なんの強制力も持たないこの夜に、身を沈めていたかった。

winter / 今泉とびら

winter / 今泉とびら

winter

しんしんと雪の降る日。大国βの都市区画クラスターの内縁部に位置する町。道を行く大人はみな冠や帽子を被っている。それらは今日では雪の有無にかかわらず見られる光景になった。彼らは戴冠者だ。「冠」こと synapse network device は、人間の脳信号を読み取り、ネットワークを通じて適切な返答を行う、脳の拡張器具である。synapse network は、人間の脳とコンピュータが相互作用して形成される総合的なネットワークであり、戴冠者とは、言うならば、2010年代以降のスマートフォンの機能が脳に直接取り付けられた人々なのである。そんな彼らを縫って歩く一人の少女は、大きめの一軒家の前に辿り着くと、インターホンを鳴らした。扉の前で傘を閉じる彼女はイヤーマフをしているが、それは冠のように環状ではない。それもそのはず、彼女は戴冠者ではないのだから。

「こんにちは。トオンさんいらっしゃいますか。」

「シエン～！」

「トオン、早いね。鍵開けて」

「わかった」

ガチャリと遠隔で鍵が開く。お邪魔します、とつぶやくとシエンは慣れたように階段を上り、トオンの部屋の扉を開けた。

「おはよ～……」

ドアの開けざまにトオンの横に浮いている何かを見てシエンはギョッとした。

「これは誰？　　というか何？　　ペット？」

「ルイちゃん」

「誰」

「妖精さんだよ」

「何」

「ルイちゃんは伝説上の生き物、妖精だよ！」

「生物実験所出身？」

「ルイは妖精だよ！　　よろしくねシエンちゃん」

「そうですか……」

よくわからないまま納得させられたシエンはしぶしぶ着席した。

「ルイはね、大人には見えないんだ」

「そう！ だからしばらく一緒に暮らしてるの。ルイちゃんはちょっと冷蔵庫から野菜とか果物を持ってくればそれで十分だし」

「食べ物はヒトと同じなのかな」

「うん」

呼び出されたのはこの妖精？ のことでなのだろうかとシエンは検討をつけた。

トントントン。ノックの音にシエンはびくりとした。トオンの母親が部屋に入ってきたのだ。

「クッキーを焼いてみたのだけれども。いかがかしら」

「ありがとうございます。頂きます」

「え～お母さん言ってよ、私も作りたかった！」

他愛のない会話の最中、ルイは母親の顔の前に滞空していた。見えていれば明らかに邪魔になる位置だ。その様子をヒヤヒヤしながら眺めていたシエンは、トオンの母親が去るとほっと胸をなでおろした。

「なんだ、本当に見えないんだ。そういえば、どこから来たの？」

「α国から」

「ええ、やっぱり怪しい。何のために？」

「よくぞ聞いてくれました！ その目的に関係することで、ルイから提案があるんだけどね。このクラスターの外に出てみない？ ルイは、他のクラスターのかつての子どもたち……今の大人たちがね、人手不足だからって、子どもたちを呼んでくれないかって頼まれてるんだ」

「そ、そう、今日呼んだのはそのことでなんだけど……一緒に来てほしい！」

「いいね、行こう」

「即答！ いいの？」

「うん、で、いつ出る？」

「二日後の朝一で」

「別クラスターにアテはあるの」

「あるよ」

そこは隣国αに位置するクラスターだった。α国はかつては永世中立国だった小国だ。α国もβ国もユーロ連邦に属し、シェンゲン協定を結んでいるために、出入国は自由なのである。それがα国にとって悪い方へ働いたのか、若者はβ国の豊かな環境を求めて家出し、そのまま帰ってこないことが多いのである。ただでさえ少子化に歯止めのかからない昨今、若者、そして人口は減るばかりである。そこでα国は若者の受け入れを進めているようだ。自国、他国を問わず、家出した若者へ衣食住と働き口、そして最新型の冠を積極的に提供している。

「確かにα国の人口流出は酷いし、理屈はわかる」

シエンは頷いた。

「笛吹き男みたいだね」

トオンは物騒な例えをした。

個人主義の波は押し寄せており、子供の人権が取り沙汰される中、行政によるパターンリズム的な措置の拡大に繋がった。人々は、子どもたちが所詮「他人」である親と生活

や価値観を長年ともにすることへの残酷さを感じ始め、更なる平等を求めた。この民意に応えた、名目上虐待への対応を主軸とした法整備によって、子どもが扶養下から抜け出すこともたやすくなった。これが養護施設の増加を引き起こし、「国家による子育て」をスローガンとした少子化対策が各地で施策されるまでに至った。

戴冠直後の「家出」はこの辺りの地域では珍しいことではない。むしろ文化であった。「家出」はひとり立ちへの前段階として広く受け入れられている。最近では単に若者が希望に応じた学校の近くに移り住んでひとり暮らしを始めることが「家出」と呼ばれており、実際、古典的な家出とはっきり区別されていない。それは各地方行政のサポートが手厚いからであった。これを後押ししたのが人口減少による家賃の低下で、不動産は都市部のごく一部を除いて投機商品としての魅力を失いつつあった。

資源の消費が抑えられた社会では、本質的、倫理的には人間こそが経済を担うべきものであるという見方に回帰し、各国の人的資源の獲得競争が熾烈化していった。激しい競争はその激しさに似ず、「やさしい社会」の実現をもたらしたのだが、それがさらに少子化を呼ぶという事態に陥っていた。

しかし、それはあくまで戴冠後の話である。戴冠前の子どもが持ちうる情報源は少なく、彼女らが企てる「家出」はれっきとした逃避であった。

「私のお父さん、陰謀論者でさ、戴冠者はマインド・コントロールされてるって思い込んでアップデートをやめちゃったんだ。それで私の戴冠も許してくれなくなった。でも私には冠が必要な。だからこの国じゃなくてもいいから、親元を離れて戴冠するんだ。戴冠できる年齢だから大丈夫でしょ」

冠にはオンラインモードとオフラインモードがあり、オンラインモードでは、アップデートを繰り返すことで、基地局や衛星を介して最新の情報や精度の高いシミュレーションを享受できる。アップデートをしないまでも、オフラインで使用可能な基本機能はあり、シエンの父だって玄関のロック解除や車の疑似自動運転モードのために戴冠している。それらは冠による個人の脳の信号の受信、干渉、増幅によって実現されている。

「でも、勝手に出ていっていいのかな」

「いいよ。別に、よくあることだし。連れてってほしい。トオンもそう思うでしょ」

「うん、外に出てみるのも経験だしね！」

シエンに同調するように、トオンも胸の内を打ち明けた。

「私は、シエンちゃんと逆でね、戴冠したくないの。戴冠したら、synapse networkの集合的な意識に接続されるでしょ？ そしたら、私が私でなくなってしまうと思う。医者には戴冠義務がある。お医者さんになれって言われてるって話はしたよね。でもね、やっぱり嫌なの。小説家の夢を諦めきれなくて。感性の護持は譲れない」

「作家を志すような人々にはそういう人が多いね。新しい世代の作家を待てば、synapse networkが優位に働くだらうことは明白になると思うんだけどなあ」

まっすぐ反対の意見を伝えてくるシエンにトオンは少しムツとしながらも、話を続けた。

「人類は図書館を作るために生きているんだと思うんだ。私もそこに並びたい。だから、外に出てでも可能性を探る。医療クラスターじゃどうしても見えないものがあるよ」

「良い表現だね」

「外の図書館も見にいきたいし」

「外の図書館ねえ……ねえトオン、マザーの集合知を覗いてみたいと思わない？」

「ええと……それは戴冠しないと得られないテレパシー・メールや SNS みたいなサービスのこと？」

「ううん、それはコミュニケーションツールじゃなくて、『意識』なんだ」

「マザーに意識が宿っているということ？」

「そう。マザーには集合精神が宿っているはずなんだ。インターネットは各国において一本化されている。プラットフォームを行き来するようなことが、国家や言語圏、そしてマザーコンピュータを跨ぐことと同義になったから、それらはまさに国家を象徴する理想的な集合知性として生きる。人間のクリエイティビティにコンピュータの演算能力が合わさって、洗練された知的生命体として顕現するんだよ」

「それは、おもしろそうだけど、やっぱりちょっと怖いな。それにアクセスできるの？」

「うん、恐らく。支配者層に存在が隠蔽されているんだと思う。例のコミュニティ“W”でそれらしい言説が流布されている。だからマザーを再発見して、真の民主主義を普及させる。私たちが社会を変えるんだよ！」

「そ、そんなことできるかなあ……」

「妖精さんもそう思うよね?!」

「……できるよ、きっと。αからマザーコンピュータにアクセスするんだ」

「そんなことできるの？」

「ここだけの秘密。α国は管理者の担い手不足なんだ。だから君が管理者を目指せば、あるいは。」

「なぜ君がそんなことを」

「私は妖精だからね！ 大人には見えない妖精」

「……なるほど」

トオンはこの一連の会話にはピンと来なかったが、良い方に進んでいるなら良いのかな？ と思った。その日はここで解散となった。

シエンが帰った後、トオンはルイと戴冠について話し合った。

「シエンも私もはじめから戴冠式はみんなより遅い方なんだ。補正プログラムに加えられるんじゃないかって怖かったくらい。戴冠が遅くなる理由は、みんなについてないからか、みんなにはない個性があるからか、ってことらしい！ シエンちゃんの受け売りだけだ」

「なるほど、シエンちゃんは詳しいね」

「ね！ シエンちゃんは頭がいいからって方なんだろうな～わたしもそうだったらいいな～」

子どもたちは戴冠することができない。これは、脳を一定の水準まで発達させないと耐えきれない恐れがあるからだとか、個人というパーツがある程度独自の機構を生み出してから戴冠しないと多様性を担保できないからだとか、個のため種のため様々な理由がある。効果的に人々を大規模ネットワークに組み込むには、15歳くらいに戴冠するのがふさわしいとされている。

社会は戴冠人口が多いほど発展する。それは国家の繁栄に直結する。国家単位、あるいは

は学術都市ではより細かい単位で、それぞれ一つのマザーコンピュータが存在し、ネットワークを支えている。

この時代においても、核家族という単位は分解されていない。これは、高学歴化によって子どもが両親の扶養下に置かれる時期が長くなったことが一因と言えるだろう。大人と子どもの境界が揺らぐ一方で、β国では戴冠式によって儀礼的な境界を設けたのだ。

トオンは、トオンたちの学校での戴冠式でのことを思い出していた。この日はトオンの学年の過半数が戴冠したが、二人は講堂の隅でそれを眺めていた。管理者たちはこの国の役人であり、神官とも言える役割を果たして、生徒たちに英知を、洗礼を授けるように、中央で冠を授けていた。そんな退屈な時間に、シエンは長方形の板を持ち込んだ。

「これ」

シエンはおもむろにそれをぼおっとしているトオンに差し出した。

「これ何？」

「これは電話」

「電話って、冠のアプリじゃなくて？」

「違う。2010年頃の物理的に切り離された電話に近いモデルの。冠なしで通信可能な道具。ロスト・テクノロジー」

「こんなもの、どこでつくられているの……」

「父の知り合いの有志が制作しているんだ。電話とメールとカメラだけ使える。割高だけどおもしろいよ。冠との互換性はなくてね。戴冠者と通信はできない」

「じゃあこの電話を持っている人だけが通信できるの？」

「うん」

「それって、なんで、どんな目的で？」

「“W”のアップデートをやめた人たちが使うんだよ」

「“W”って、反政府的なあれだよな？ そんなの大丈夫なの」

「反政府だなんてそんな。みんな真実が知りたいだけだよ」

「ならいいのかな」

トオンはそんなこともあったなあと思った。

ルイはそんなトオンを見て、ふと

「どうしてシエンちゃんを誘おうと思ったの？ 本当に連れてって大丈夫かな」

と聞いた。

「あのね、シエンちゃんは戴冠式を行えないから外に行きたがってて、本人もそう言うてるけど、それだけじゃなくて」

「シエンちゃんは虐待されてると思うの。本人は何も言わないし、私も何も言えなかったけど、痣が見えてることがあるし、真面目なわりに学校にも何にも言わずに来なくなることもあるし。だからここから逃げた方がいいと思った」

「わかった。絶対幸せなとこに連れてってあげるから！」

*

出発の日。天気は曇り。今日は二人の学校はない。

「寒いね」

「この時期に雪が降っていないということは特段寒いということだからね。ちゃんと厚着してきた？」

「もちろん！」

トオンは着るものに迷ったものの、適切に、趣味のカントリースキーの格好で来ることができた。スキー板まで持ってこようとしたのは秘密だ。

家出といっても、どう心構えたものか、誰もわからなかった。気分はまるで遠足だ。ルイを先頭に歩き始めたトオンとシエンは、だらだらと昨日の話を続き始めた。

「きっともつと synapse network は外部化されるべき存在なんだ。それは回帰ではなく、発展の行き止まりとしてそうであるべきだったと思う。だから、シエンちゃんの発想とはちがうんだけど、確かにマザーに意識があるなら公開されるべきだよ。もちろん、私たち未戴冠者も使いやすいユニバーサルデザインとしてね」

「いつの世にもそういう言説はあるけどね、トオン、行き止まりなんてない。時代の流れには逆らえないものなんだよ」

「そんなことない。今の冠のあり方では、意識の一部が転送される形でテレパシー・メールが行われている。あれじゃ怖いよ！ 自我の喪失をもたらしてしまう。本当のところ、全ての戴冠者は集約された意識のもとに動いているのかもしれない。それなら嫌だな。今の私は私がいなくなるのが嫌だもん」

「でも、昔から少なからず人間は他人の影響を受けて自己を創造してきたんだよ。それに、私は集合精神に接続しても変わらない、自我が耐えられる自信がある。自らを発展させるのに多少のリスクは負うつもり」

「そういう問題なのかなあ。一気に自己が根っこから変わっちゃうかもしれないじゃん！」

「それこそそういう問題なの？ その変化だってそのときの私の選んだ道。私は変化を恐れないよ。それにみんな戴冠後と戴冠前で特に行動は変わってない」

「変わってないなんて言い切れないよ。哲学的ゾンビ、知ってるでしょ。ああなると思えちゃうの。私は、戴冠者が怖い。だから、シエンにも……」

戴冠してほしくない。初めてトオンはその気持ちを声にした。シエンは目を丸くしたが、すぐにいつもの調子で話し出した。

「まあ、正直、自我なんて私は失ったっていい。私は図書館の一部になれたらいい。これからは AI によるマザー単位の巨大図書館とともに人類は生きていく」

「そんな！ 私だってそこまでは言ってないよ。図書館とひとつになるために生きていくんじゃない」

「人と図書館の関わりも、彼我の境界と同様、時代を追うごとに移り変わる程度の問題だと思う」

寒さを忘れて議論は白熱した。ルイは二人を先導しながら、熱心な若者を見つけたなあと少し呆れ気味に微笑んだ。

*

昼下がりに。プルプルプルと特徴的な電子音が鳴る。

シエンのカバンからである。シエンは冷静に、カバンをおろすと、電話を取り出して、発信元がシエンの父からであることを確認すると、ルイやトオンと距離をとった。

「おい、どこにいる」

「トオンと森の方にいる」

「クラスターの外まで出てか」

端末にGPSがついている……！ シエンは初めて気がついた。

「雪が真新しいところで遊ぼうって」

「夕方までには帰って来いよ」

ブツリ、途切れた音を待って、啞然としたまま、不器用にやけに大きい声でシエンはトオンとルイに呼びかけた。

「そろそろ休憩にしよっか」

木々の間にロープを巡らせ、ビニールシートを被せて括りつける。その下に焚き木を集め、ガスバーナーで火をつける。すると、

「私のバイブル。持ってきたけど」

こっそり端末を挟みこんでおいたそれを炎に放り投げた。

「やっぱりいらぬ。これから得る膨大な知識があるから。いつまでも囚われてはられない。それこそがこの本に学んだことだから」

端末に気づかなかったトオンは、本を焼くのは良い気はしないな、と少し思ったが、今は暖かさの方がありがたいのも事実だった。

＊

夕暮れ。ルイの言う目的地へと到着した。そこは熱源だった。

「今夜はここで過ごしてもらおうことになる。大人たちはルイが連れてくるよ。時間がかかっちゃうけど、ここの熱源で待っててね」

「うん」

いそいそと去ってしまったルイを背に、二人は熱源の扉へと向かった。

熱源——計算されて配置された水冷、空冷式コンピュータ群の排熱によって温室としての機能を果たす、どこにでもある公園のようなものだ。もちろん普通は寝泊りなんてする場所ではないのだが、寒冷地の若者や酔っ払いがたまに寝転んでいる。寒さを凌げるだけ便利だ。

「これは」

「熱源開閉用の冠だね」

トオンとシエンは顔を見合わせた。

「うん……」

沈黙が流れる。

トオンはほんのちょっとどこかで、もしかしたら、シエンが戴冠する日なんて来ないんじゃないかと思っていたし、いずれにせよ、まさか、こんなにすぐ訪れるとは思わなかった。

「私が被るよ」

シエンが言った。
「ルイちゃんを呼び戻して、他に開ける方法がないか聞いてみる」
「トオン。」
諫めるように、冷徹にシエンはトオンを呼び止めた。
「私が望んだことなんだから。諦めて。これはお別れじゃないから」
シエンが振り返ると、トオンは既に戴冠していた。
「さ、行こう」
熱源からの暖かい風が二人を包む。厚着するには少し暑すぎた。トオンは嫌な汗が吹き出るのを感じながら一番上の服を脱いだ。
小川とサーバーラックの間を縫って歩く。トオンはおもむろに地面の草花を摘み取り、シエンは自身についた雪を川に放り投げている。
トオンはシロツメクサの冠をシエンに差し出した。
「ありがとう」
その目が不安げでこちらに向けられていないようであるのをシエンは感じ取ってしまった。

*

二人の管理者が古めかしい寒冷地用 EV 車を降りた。「室長」と呼ばれる男は手にモバイルバッテリーに繋がれた自律式浮遊小型ヒューマノイドを握っている。彼らは何も被っていなかった。

「“ルイ”の試運転も上手く行った。“ルイ”に対する戴冠者の視覚制限も機能している。他クラスターでも個人に試す機会が設けられてよかった。ここから人数を増やして調整していく」

「戴冠前の子どもが見つかったのは僥倖ですね、室長」
「ああ。管理者の確保も大変だ。新しい人材が立候補者でまかなえるものでもなしに、国の根幹を家出した若者に任せるのもどうなんだろうが……今回の子たちは管理者に関心を持っているようだし、期待していい」

もはや成熟した社会に身分制はないと言って等しく、管理者の座も大衆への精神的優越感くらいしかもたらさないのがあったから、わざわざ忙しい職に就こうなどと考える人間は減少してしまった。信念を持つわずかな者だけが管理者を担っている。そこには存外悪意などは介在する余地が少ないのである。

管理者たちの話は万事上手く行きそうな「子どもたち」の件から離れ、進行中の業務に移った。

「もう人類は天候操作に踏み込むフェーズになったんだが、人々から温暖化対策用の観念を取り除くのに時間がかかってしまっているな」

「まだマインド・コントロール不能ですか？ 室長」
「ああ。彼らの行動によって氷期が進行するのはマズい。食糧問題が一番の難点だ。海面が低下しているのはまあいいが、海底火山の活動が高まるのも、△国島嶼部の学術都市や建設途中の水中都市が不安だ。こちらでも、氷河が拡大したことで K-4……新たな寒

気団が見られるようになった。寒気団は南下し、偏西風に乗り、暖かい北大西洋海流を
通ってユーロ連邦までやってくることで、水蒸気と寒さ、要はこのドカ雪をもたらして
いる。気象の変化はここまで顕著に現れているのに、何故寒冷化への警鐘が民衆へ届か
ないのかさっぱりわからん」

「そこは結局人工工学領域ですから。人文知に頼らねばならないというのは、我々技術
者としてはもどかしいですね。私も論文を漁ってみました。よりによって人工工学分
野で最先端のγ国が国策で AI による粗悪な論文を量産し始めているのが面倒です」

「AI か。せいぜい事故が起こらなければいいんだが。“W” もそうだが、あれを過大評価
すると厄介だ。マザーは確かに集合精神を獲得した。我が国は最も鮮明に意識を観測で
きている。しかし、集合精神は集合知に辿り着くどころか、衆愚に陥ってしまった……
現実に人間が振る舞うようにな。だから管理下にも、愚かしく人間集団らしいニューロ
ンと IC の集積物があるだけだ。直接民主制をとる国が少ないのも道理だった。政治的・
宗教的価値はあれど、“W” に要請されたところで、マザーを公開するわけにはいかん。
安全保障上の問題もある」

「それを理解させられないのが困りものですね。“W” はもう戴冠者ではなく、マインド・
コントロール下でないわけですから」

「それどころか、今や “W” はマザーの信徒だ……」

雪上を歩き慣れていない管理者たちは疲れた様子で熱源に辿り着くと、熱源への扉の
鍵を開けた。

サーバーのもとで二人の子どもがすやすやと眠っている。

「冠」 / 寛容蝕物

「冠」 / 寛容蝕物

「冠」

寺尾明美は知っていた。

自分が所属している部署を統括する人間が無能であることを。

だが、その事実気づいているのは私だけだった。

人の裏を覗いたり、観察したりするのが人一倍好きな自分だからこそわかったことかもしれない。

誰もが憧れ、羨望の眼差しを向けるその影には決まるとある男がいた。

彼の苗字は白山。

名前は知らない。

だが、とてつもなく有能であり、部長を陰から操り、成績トップを維持している超人だ。

私がこの会社に入社したときにはすでに白山先輩は部長補佐を務めていた。

入社当初は成績優秀な部長の補佐をしているだけでお金がもらえるなんて、なんて役得なんだ、と妬んだ。

だが、その妬みは全くの見当違いであり、物事の本質を見抜いていなかった。

部長は何もしていなかったのだ。

いつも寝る間を惜しんで仕事に打ち込んでいるのは白山先輩だった。

先方との打ち合わせ、交渉、契約。

一度白山先輩が電話しているところを見たことがある。

彼の口調は普段の彼からは想像できないほど軽快で明るく、容易に相手の心の中に入り込むような穏やかで温かい声だった。

話し相手が隙を見せたその瞬間、彼は遠回しに契約内容の説明を行う。

相手は最初、契約の話をしているとは気づかない。

いつの間にか彼の世界に引き摺り込まれ、彼のペースに飲まれていく。

そして相手は気づく。

自分に残された選択肢は首を縦に振ることだけであることに。

白山先輩は紛れもなく天才だった。

どこで手に入れたのか、天性のものなのか、わからないが、彼の人心掌握術は神業だった。

いつからか、私は白山先輩に惹かれるようになっていた。

白山先輩を見つけては目で追い、心配しながらも気にかけている自分がいた。

ある日、白山先輩と自動販売機の前で鉢合わせた。

2人だけの時間、私は何か話そうと話題を探したが何も見つからず、いつもの癖で白山先輩の生態を観察してしまった。

するとその視線に気づいた缶コーヒーを買った白山先輩は冷たい目で「なに」

と言い放った。

それが私と白山先輩の初めての会話だった。

私は白山先輩が見せた契約相手と私とのギャップで心が締め付けられた。

そして思った。

白山先輩と契約したい、と。

その時、私の中でとても素晴らしい案が浮かんだ。

部長直属の部下が白山先輩であるならば、白山先輩の直属の部下に私が立候補すればいいのだ。

白山先輩の手足となり、少しでも業務の負担を減らすことができれば、白山先輩は仕事に追われることはなくなる。

否、なくなることはなかったとしても一緒に地獄に落ちることができる。

そして何より知って欲しかった。

先輩の活躍を知っている、そして陰ながら応援している私という人間がこの世にいることを。

皆が皆、部長の功績だと思っている先輩の活躍を私は知っている。

その事実を伝えたかった。

そして運命の時。

再び白山先輩と鉢合わせるタイミングが来た。

私は口籠もりながらも自分の案を伝えた。

すると白山先輩は少し微笑んだようにみえた。

それは私の見た幻想かもしれない。

白山先輩はいつもと同じように冷たい目で「あんたには重荷すぎる」

と突き放した。

私は引き下がらず、それでも構わないと告げた。

私の必死そうな形相を見て思ったことがあったのか、

「そこまで言うならやってみればいい」

とあっさり許可をくれた。

それから私と白山先輩の地獄が始まったのだった。

まず朝8時に出勤、その日に打ち合わせを行う企業のリストを作り、緻密なタイムスケジュールを練り上げ、それを10時に出勤してくる部長に報告し(もちろん7時に出勤したように白山先輩がタイムカードを切る)、許可が下りれば現地へ向かい、打ち合わせをセッティング、午前中3社、昼食を済ませて午後には7社とミーティング、会社に帰ってきたのは夜8時を回っていた。

部長は17時には退勤し、その後のミーティングは白山先輩と私に投げた。

もちろん、部長は20時現在も仕事であることになっており、するわけない残業の手当も部長の給料を肥やしていく。

改めて部長の立場は楽すぎると感じた。

これで自分よりも高い給料をもらっているのだとするとさすがに温厚な私でも思うところがある。

何も言わないが、白山先輩も心の中ではふつふつと怒りが溜まっていることだろう。

すると私のことを気遣ってか白山先輩は口を開いた。

「どこか飯行くか」

私は元気いっぱい返事をして首からぶら下げたネームプレートを机に投げ捨てた。

白山先輩行きつけの料亭は静かだった。

完全個室で和室のその部屋からは美しい中庭が見えた。

ししおどしの音が響き、鈴虫が鳴いていた。

その空間に圧倒されていると

「部長を補佐してて唯一良いことがあるとすれば、どんなに高い料亭に来たとしても経費で落ちることだな」

白山先輩は呆れたように言った。

お酒が運ばれてくると、私と白山先輩は乾杯をした後口に運んだ。

私は白山先輩とサシで呑むことなんて無いと思っていたため、感激だった。

仕事で疲弊した体が徐々に回復していくような気がした。

「今日のご苦労だったな」

突然白山先輩から声を掛けられたため驚いた。

「まさか本当に1日やり遂げるなんて、正直思っていなかった。俺はあんたのこと過小評価していたようだ」

私はここだ、と思い、間髪入れず私の名前はあんたじゃないです、寺尾明美です、と言った。

すると白山先輩は少々小っ恥ずかしそうに

「そうだな、明美、これからもよろしく頼むよ」

私は昇天する思いだった。

憧れの先輩と一緒に仕事するだけでも幸せなのにサシで呑んで名前呼びなんて。

その後も雑談を交えながら呑み進め、白山先輩の頬が赤く染まってきた。

私の顔は赤くなっているか、自分ではわからないが、体温が上がっているのを感じた。

だいぶ酔っている様子な白山先輩は突然夢を語った。

「俺は…社長になりたいんだ」

私は強く頷き、先輩なら絶対なれますよ、と言うと

「今のままじゃダメだ…俺にはあの人がいる。俺はあの子の操り人形なんだ」

そんなことない、先輩は操り人形なんかじゃない。

どちらかと言うと白山先輩があの人、つまりは部長を動かしてる。

政治体制で言うと傀儡政権である。

「今のままじゃ、俺は部長のアクセサリーだ」

その一言は私を思考させた。
白山先輩が部長のアクセサリー。
つまり、部長は白山先輩という飾りをつけることで美しく見せている。
自分の価値を上げている。
その例えはとても筋が通っていて理解できた。
では私はどうだろう。
私は白山先輩のアクセサリーになれたのか。
今日タッグを組んだだけでおこがましいと思われるだろうが、私の立場は白山先輩にとって何なのだろうか。
その思考は白山先輩が眠りについた時ぱたりと止まった。
私は先輩を家に送り届けた。
その最中、先輩の口からは度々社長になりたいという嘆きが漏れていた。
私は強い人だと思った。
こんなに部長にいいように使われているのに、先輩は一言も部長の愚痴を言わなかった。
彼はただ夢や野望を語った。
その顔はとても綺麗だった。
1年後、部長はついに社長に選ばれた。
業績は社内で年間通して一位。
その王座は誰にも譲らなかった。
部長自らの力ではないにもかかわらず。
白山先輩は絶望していた。
どこかで自分の価値を知っていてくれる人がいるのだと期待していたからだ。
結局私以外真相を知る者は現れることはなかった。
そして白山先輩は自虐のように言った。
「アクセサリーから王冠になったか…」
白山先輩はこれから王の冠として、生きていくのだと、自分の未来を思い、嘆いた。

二〇二三夏 通常作品

二〇二三夏 通常作品

二〇二三夏 通常作品

効用最適化問題 / 廣瀬 勇実

効用最適化問題 / 廣瀬 勇実

効用最適化問題

私は常に選択している。

コンビニで昼ご飯を選ぶとき、友達と食べに行きメニューを選ぶとき、スーパーで食材を選ぶとき。どんな時でも選択が付きまとう。選択はすべての人に与えられる。かける時間は人それぞれだと思うが、私はかなりかけるほうだ。

コンビニであれば40分は悩む。まずおにぎりにするべきか、パンにするべきか。どちらかを選んでも次の選択が待ち構えている。味、見た目、価格、そもそも買うべきかどうか。食べ物なんて食べたらなくなると思って、何も買わないこともある。

この悩む時間はなかなか苦痛だ。選択をするのは1つの店舗に限らない。様々な店舗に移動する。移動時間はかかるが、比較してより満足のいくほうを買いたい。選択は広がるばかりで、足も頭も疲れてくる。しかしやめることができない。

食に限らず、選択は大いに溢れている。どの服を着るか、どの授業を履修するか、どの動画を見るか。なぜ私は選択しなければいけないのだろうか。

生まれたころから選択していたわけではない。無意識にはしていたかもしれないが、悩む過程を抱えていないから私の考える選択とは違う。

悩みと選択の苦しみの発生は同時かもしれない。

自分は経済学部の大学生だ。日本史が好きで、戦前の日本経済の分析をするためにこの大学に入学した。経済学の一分野に消費者行動理論というものがある。消費者がどのように購入を決定したりするかなどが研究されている。「経済数学」という授業を受けた際に 最適化問題というものを教授から教えてもらった。

最適化問題は消費者行動理論のもっとも基礎の部分と言われている。「ある目的関数が最大または最少となるような解を求める」問題のことだ。最大、最少を求めるときに偏微分や全微分、コブ=ダグラス関数などなんだかよくわからないものを使う。一見ただの数学の問題に思えるかもしれない。しかしこれを使うことで、消費者がどのタイミングで購入を選択したりするかが見えてくる。

消費者は様々な制約条件の下で、自分の効用が満たされるように財を購入する。効用というのは、消費者が財を購入した際に感じる満足度の度合いだ。これに微分やらを駆使すると、消費者の効用が最大となる条件を求めることができる。最も自分が習ったのは初歩の初歩で、実践レベルではない。

経済学では初めに理想的な条件を考えて、どんどん条件を付けくわえて現実へと近づけていく。専門的になればなるほどさまざまな制約条件が増えていき、より複雑になる。つまり次第に現実の選択へと近づいていく。

経済学を学ぶことで、選択の意味は分かってくるだろうか。

断罪 / 青石 すみれ

断罪 / 青石 すみれ

断罪

電話が鳴っている。そう認識した馬場ははっと目を見開き、突っ伏していた机から頭を上げる。背中に走るぎしぎしとした痛みを気にするより早くスマホの画面に映っている発信者の名前を確認し……ほっとして電話に出る。

「……何だ、三上」

『あ、先輩、寝てましたでしょ』

電話の向こうから、からかうような声音が聞こえてくる。にやにやしている子憎らしい顔が浮かんでくる。

「モーニングコールは求めているんだが」

『何言ってるんですか。あと30分で会議始まりますよ』

「は？」

『僕の大学時代のバイトの友達と！ 23時から！ オンラインで！』

段々と三上の声が大きくなり馬場は思わず耳からスマホを離す。しかしその言葉を聞いた瞬間、馬場の頭が急速に動き始める。

「すっかり抜けてた。爆速で準備するわ。IDとパスは送っといてくれたよな？」

『ばっちりです！』

「サンキュな、三上」

一瞬三上が黙る。次の瞬間、

『はい!!』

嬉しさを押し殺そうとして殺し切れていない声が大音量で聞こえてきた。自然と子犬のイメージが浮かんでくる。ぶんぶんとしっぽを振りこちらに駆け寄ってくる子犬。ちょろい奴だ、と笑い、電話を切った馬場は準備に取り掛かる。黒の長袖ハイネック。紺のセットアップのスーツ。着替え終わると髪の設定に移る。ワックスを手に取り、適当に髪を流していく。姿見を見た。いかにもベンチャーな、希望を追い求める若者です、といった出で立ちの自分が映っていた。あと10分。時計を確認した馬場はパソコンを立ち上げる。会議アプリを開き、IDとパスを入れる。会議部屋には三上しか入っていなかった。

「待たせたな」

『間に合ってよかったですね』

「時間があるようだから最終確認始めるぞ。相手の名前は」

『瓜江 類君』

「歳は」

『僕と同じ、24 歳』

「お前は」

『24 歳』

「違う」

『会議が始まったら喋らない』

「そうだ。全部俺に任せとけ。俺は先輩だからな」

『はい』

「……そろそろ来る頃かな。マイク、ミュートにしとけよ」

わかりました、と声がして、三上のマイクがミュートになる。収入を増やせるかがかかっている大事な会議だ。絶対に成功させなければ、と静かに気合を入れる。すると待機室に人が入ってきた。名前は『瓜江 類』。許可ボタンを押し、少し待つ。画面に現れたのはほっそりとした顔の、気の弱そうな男だった。視線が定まらず、眼球が落ち着く場所を探そうときょろきょろと絶えず動いている。三上はなかなか良い奴を連れてきたな、と心の中で彼の目利きの良さにひっそりと舌を巻く。

「こんばんは。瓜江類さん、ですよな？」

彼の肩がびくり、とはねた。へな、と笑い、

『は、はいそうです』

と答えた。眼球はようやく動きを止めていた。しかし、相も変わらず視線は合わない。

「今日お話をさせていただきます、馬場と申します。よろしくお願ひします〜」

よろしくお願ひします、と彼が小さく頭を垂れた。

「あの、三上君から簡単に稼げる方法があるって聞いたんですけど……僕は何をすればいいんですか」

早速来たか。しかももうやる気になっている。幸先がいい、と心の中で思いつつにっこり笑って質問を投げかけた。

「ネットワークビジネスって知ってます？」

ネットワークビジネス。それは簡単に言えばマルチ商法である。馬場が所属している組織ではシャンプーや化粧品などをまずは自分で買い取り、それを他人に売りつけていく、という手法をとっている。一人に売りつければ決められた金額の金がもらえ、人数を増やせば増やすほどそれに比例した金額の金が手に入る。だが、それだけではない。売りつけられた者も会員になり同じことをしたらその分の金も大元の自分に入ってくるのである。何も考えずに聞いていると倍々に金が増え、夢があるものだと思えるが、現実にはなかなか厳しい。ネットワークビジネスに詳しくれば一発で見破られるし、人脈も無限ではない。

「それって稼げるんですか？」

「稼げますよ！」

稼げるわけないだろ。俺だってギリギリ利益出してんだぞ。

「そのシャンプーとか化粧品って結構良い物なんですか？」

「もちろんです。私も今シャンプー使っているんですけど、洗い終わった後頭がさっぱりして。きしみにくくもあって良い物なんだな～と思ってますよ！」

普通のヤツとあまり変わらないように思ったがな。

「今日はいろいろお話ありがとうございました……僕、会員になってみようと思います」

「ありがとうございます！」

金づるになってくれて。

「昇進……ですか？」

「ああ、君は最近営業成績が良いし、新人の教育も頑張ってくれていると聞いている。ぜひ幹部になって一層励んでもらいたいと思ってな」

何ということだろう。入会して3年。もうこんな話が来るとは。幹部は特別手当がもらえるというシステムがある。そうすれば、多少なりとも、少なくとも今までよりは贅沢な暮らしができるだろう。

「その話、お引き受けします」

社長の顔が少し緩んだ。

「それは良かった。……実は最近人手不足でね。幹部だった奴も次々に辞めていったんだよ」

「そういうことだったんですね」

何はともあれ抜けていった奴に感謝である。

「君はそういうことが無いように頼んだぞ」

社長の顔を見る。口元に笑みは浮かんでいたが、目は昏く全く笑っていなかった。

日曜日。仕事は休みだが馬場は身支度を整え外に出る。太陽は昇り、ぼかぼかとした気持ちの良い天気だ。あの後三上に昇進のことを伝えると自分のように喜び、お祝いとしてランチを食べに行きましょう、僕の奢りで、と言ってくれたのだった。三上はよく先輩である自分を立てる。三上は馬鹿だ。素直な奴だ。馬場は三上のことが気に入っていた。そんな奴と飯を食べるのも悪くない。勝手に鼻歌が出てくる。馬場は車を目的地へ走らせる。

「……瓜江君、あまり勧誘できてないみたいですよ？ 家にたくさん在庫あるって半泣きの電話来ましたもん」

「あ、やっぱり？ あいつには無理だと思っていたんだよな。話すの無理そうだし、押しも弱そうだし。視線もおどおどしてて。まあ、俺たちの稼ぎにも繋がるから精々頑張っほし……」

「先輩って、」

三上は視線を上げずスープをすすする。

「騙される方が悪いとか思ってるタイプですか？」

「当たり前だろ。普段の生活とか意思がしっかりしてないからこうなるんだよ。騙されたくなきゃそこから変えろって話。まあ、それが無理だから大人になってもそんな様なんだろうけど。お前もそう思わない？」

「十理くらいありますね」

「だろ～？」

「じゃあ、」

三上は口に含んでいた肉を飲み込む。

「騙す方と騙される方ってどっちが苦しいと思います？」

「……どうしたんだ急に。そんなキャラだったか？」

「いや、最近本を読んだんですけど、その中にこの言葉があったんですよ。答え自体は理解できたんですけど、話の内容が理解できなくて。先輩の意見も聞いたら何かわかるかもなー、と」

そういうことか、と納得した。三上が読書好きなことを馬場は知っていた。

「そりゃあ、騙される方が苦しいだろ。嘘をつかれた、ってのがメンタルに来るし。それこそ瓜江みたく在庫をためて赤字になったりするし、場合によっては借金ルートよな。まあ、騙されるのが悪いんだし自業自得だろ」

「そうですか……」

「どうだ、参考になったか？　　というかその本教えてくれよ、俺も読みたいんだが」

その時だった。

「馬場!!」

突然大きな声がレストランに響き渡る。自分が呼ばれたことに気づき、声が出た方向に視線を向ける。瓜江が立っていた。そしてそのままこちらのテーブルへ大股で近づいてくる。目は血走り、体はぶるぶると震え、顔が真っ赤だ。よく見ると頬は前見た時よりもこけ、饅えた臭いが鼻を突く。

「瓜江……さん、どうしてここに……」

慌てて笑顔をつくる。

「お前の言う通りにしたのに！　　そうすれば全部うまくいって……友達にも家族にも勧めたのに……そしたら胡散臭がられて誰もいなくなった!!　　どうしてくれるんだよ!!」

唾が飛ぶ。怒り慣れていないのか声が所々裏返り聞いていて本当に滑稽だ。馬場は大きいため息をついた。せっかく楽しい気分だったのにぶち壊しやがって。怒りに任せて声を張り上げる。

「うるせえな!　他人に全部任せてんじゃねえ!　自分で考えろ!!　俺たちは悪くない。全部馬鹿なお前の自業自得なんだよ!!」

「なっ……お前なんか……お前なんか……」

言葉を吐き出す。

「地獄に落ちろ」

気づくと辺り一面闇だった。空気が重い。先程までのように馬場は椅子に座っている。だがロープで縛られているわけでもないのに自分の体が自由に動かせない。まるで体のいたるところに重しがつけられているような感覚。

「三上！ どこだ!!」

静かな声でした。

「ここは天国と地獄の狭間です」

三上の声だった。次の瞬間、向かい側に座っている三上の姿が浮かび上がる。三上は落ち着いている。まるでこのようになるのを知っていたかのような態度。声が震える。

「なあ三上、助けてくれ。金縛りか知らないが体が全然動かせないんだ」

「罪人を救済する方法は一つしかない。それは地獄へ連れていくこと。罰を受けることで魂が浄化される。だから私がお前を地獄へ導こう」

「お前は……」

三上はもう馬場の知っている三上ではなかった。冷たい目をしてまっすぐと馬場の目を突き刺してくる。

「何で……何でだよ」

「お前が一番分かっているだろう」

「俺は悪くない……騙される方が悪い!!」

三上がはあ、と息をつく。

「……先刻、騙す方と騙される方、どちらが苦しいかと私はお前に尋ねたな。するとお前は騙される方が苦しいに決まっている、と答えた。裏切られて精神を病み、在庫に追われ、借金にも追われる、と。……だがそれは生きている間の話だ」

呼吸が苦しい。頭が割れるように痛み、体は酸素を求めている。

「地獄は本当に酷いところだな。罪人といえども業火に焼かれ、苦痛に喘ぎ、藻掻き苦しんでいる様は見えて少しばかり心が痛む。だが、これはお前の言葉を借りれば『自業自得』。さあ、罪人よ。私がお前を導いてやろう」

馬場は理解した。存在するのかもわからない、御伽噺の世界であった地獄に自分に行くのだと。恐怖もあったのかもしれない。だが、それより強く馬場の中には怒りが満ちていた。

「……お前だって、俺を騙していただろうが……許さねえ。お前も、地獄に落ちろ!!」

次の瞬間、周りの闇が急速に質量を伴って馬場の周りにのしかかってきた。座っていた椅子ごと地面に倒れこむ。もう暗闇しか見えない。

しかし脳は過ぎ去った日々を見せつけてくる。騙された奴らの泣き顔。社長の冷たい顔。両親、昔の友人……。最期に、三上の笑顔。褒めるとふいに顔に覗く、頬が上気して、はにかみ、得意げな笑顔。それを見ると馬場も喜びを感じた。騙した後に感じる昏い喜びではない。もっと、直接的に伝わり、心にじわじわと広がっていくような明るい喜びだった。こいつは馬鹿だと思った。馬鹿正直で純粹。汚れた世界には似合わない、清く、明るく照らす笑顔。だが、こいつは俺を騙していたのだ。だからこいつの笑顔も嘘だ。俺は何も変わっていない。こいつに勝手に心を許した馬鹿な俺は元々いなかったのだ。しかもさっき言いたいことも言ってやった。清々する。

だが、心の中を埋め尽くしていたのは空虚のような、重い泥水のような、軽くて、重

いものだった。体が地面に沈んでいく。なんて、不快な気分だ。

「瓜江君、おつかれ〜」

「まだその設定続けるんですか？」

「気に入ってんだよ。楽しかったでしょ？」

「……まあ激しい感情出すのははじめてだったので。否定はしません」

「なかなかいい演技だったよ」

「三上君もね」

「……ん？」

「ずいぶん楽しそうでしたよね。あの罪人と話しているとき。僕らの笑顔はあんな奴に向けていいもんじゃありませんよ」

「……情が移っちゃったのかなあ？」

「笑えない冗談は口から出さない方が みんな幸せです」

三上は肩を大げさにすくめる。

「じゃあ、次の罪人を裁きに行きましょう」

「君は元気だねえ。私は上に寄っていくよ。報告しに行かなければ。……あと、少し疲れた」

「……最後何か言いました？」

聞き取れなかった瓜江が問う。

しかしすでに三上は純白に輝く羽を生やし、ふわふわと宙に浮いていた。手を大きく振っている。

「ほらー、早く来ないと置いていくよー」

大声で呼びかけられる。自由な人だ、と思いながら瓜江も羽を生やし、天へと昇っていく。

二人の姿と声はもう、誰にも届いていなかった。

——だまされる人よりも、だます人の方が、数十倍くるしいさ。地獄に落ちるのだからね。

詩集：マジックアワー / 汐咲ひかり

詩集：マジックアワー / 汐咲ひかり

詩集：マジックアワー

雨音

大福ひとつ 餡子の甘みが求肥に移って
いつまでも口の中に広がる香りで
今日も安らかに眠れそうです
机の灯りが万年筆に反射して
起こした英文は将来の私を安心させるのです

嵐の夜

脳裏によぎる切っ先が
その状態の異常性をはらみ
きっと刺されることを望んでいる
喚くことで解決することは殆ど無いから
私は静かに動かずに
嵐が通り過ぎるのを待っている
横たわる事実から目を背け
助かることをまるで想像できないから
首筋に突きつけられた刃先の冷たさと
一体となって目をつぶるのだ

落葉

なんでなんだろう たくさん理解しようとするけど
朝日が昇るその瞬間まで
お父さんが人里離れた仕事場へ行くその瞬間まで

僕はわからなくて
ベッドの中で
それがなぜなのかたくさん理解しようとしている

歯軋り

その刃はいつしか土に還り 化石となり 指で撫でた時に

油でカラカラと空気が抜けていく中で
ゆらゆらと漂流するには あまりに眩しい小麦色

あと一時で呼吸が途絶えるというのに
その執着が 未だに噛み締めては切り削っていく

マジックアワー

夕陽が沈んでもなお
遠くの地平線に残光を覗かせる時間

だだっ広いスーパーの駐車場で
陽気に挨拶され
何事もなかったかのように応じるものの
「ベビーカーを探してるんだ」と

困っていることすらも楽しそうだったので
ここには売ってないという落ちすらも期待しながら
もう夜になることを隠した

うみ

山頂に立った時
遠くの峰々が連なって
稜線の際に向かって藍色に染め上げ
いくつもの線が重なり合って
大海原のもと
雪を被った峻嶺のみが白銀の島として
荒ぶる波に聳え立つ

ひとりぼっち

重たい臉が夕陽に焦がされて
街が影に飲み込まれる前に
処刑台に響く5時のチャイム
冷たい風をあと少しうければ
波止場で身を投げる準備はできている

鳴り止む前にどうか私を見つけないで
カモメたちが沈み行く夕陽に向かって遊覧飛行
しゃがみこんで
生暖かいコンクリートに手のひらを当てると
小さな石ころで手がプチプチと痛かった

朝日

君を殺すにはどう生きたらいいか
君が生き絶えるのを見届けるには
すぎるほどの執着もないのに
井戸の底に落ちて 泥中と真水の狭間で
乾いた笑みと共に息絶える
明日には誰も彼もが忘れるなんて
冗談にも程がある

しんではならない
あのひとも自らの契りに首を絞められているのだろうか
いくつかの人生を狂わせてしまうほどの罪の重さを
軽んじる危うさが
生き地獄にも程がある

そんなに速いスピードだと
息が切れてしまうことが 目に見えている
いくつもの夜を乗り越えて その度に新たな朝日が昇るのであれば
君の葛藤により誰一人殺さずに済んだその結果を
どうか認めようではないか

奥付

奥付

奥付

案山子 2023 夏号

<https://puboo.jp/books/page/write/135031>

著者：新潟大学文芸部

<https://puboo.jp/users/sindaibungeibu>

電子書籍プラットフォーム：パプー（<https://puboo.jp/>）

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二三 夏

著 新潟大学文芸部

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
